

Communications of the

Vol. 1
2020

Palaeo Perspective

旧石器時代研究への視座



旧石器時代基礎研究・次世代育成グループ



Palaeo Love



Communications of the
Palaeo Perspective
旧石器時代研究への視座

Palaeolithic Learning, Opportunity and View
[Palaeo love]

表紙写真：神子柴遺跡の尖頭器の剥離面

巻頭言

石器の実測

：感情移入と突き放し

小野 昭

1

研究ノート

長野県御代田町宮平遺跡採集の石器

両角太一

10

コメント

両角太一論考

「長野県御代田町宮平遺跡採集の石器」
に接して

橋詰 潤

15

旧石器辞典

荒屋型彫刻刀形石器

小野寺優斗

16

論説

神子柴論争

堤 隆

18

旧石器遺跡への旅

ホーレ・フェルス洞窟

堤 隆

30

**旧石器基礎研究・次世代育成
研究グループ：2019年度活動概要**

32

論考

旧石器時代に「間接打撃」
テクニックは存在したのか
：実験石器製作と岩井沢遺跡
の石刃技法の対比から

金 彦中

2

コメント

金彦中論考

「旧石器時代に「間接打撃」
テクニックは存在したのか」
について

大沼克彦

6

考古学の本棚から

旧石器時代を学ぶために
高屋敷飛鳥

高屋敷飛鳥

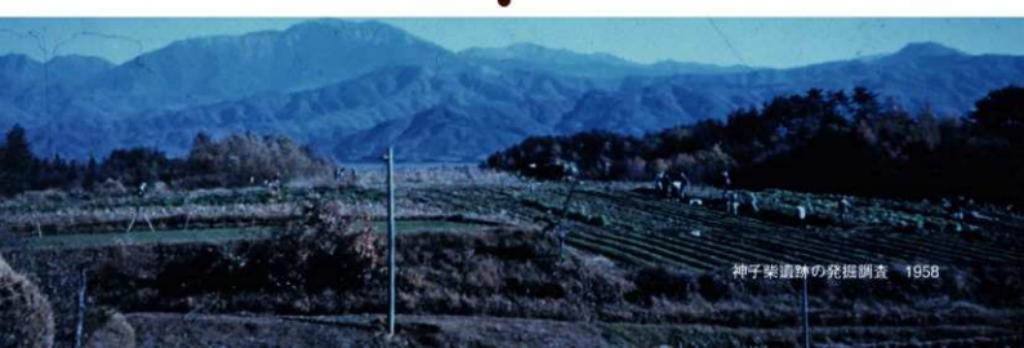
7

リサーチデザイン

技術組織・痕跡分析・地域研究
沢田 敦

沢田 敦

8



神子柴遺跡の発掘調査 1958

Preface

Measurement of lithic tools:
It's emotion and ruthlessness

Akira ONO

卷頭言

石器の実測:感情移入と突き放し

東京都立大学名誉教授 小野 昭



「え、俺ってこんな面倒なことを、これからやっされ、いま目の前に在って実測しているんだなていくのかな・・・」

と思うと、啄木をもじって言えば「実測の手ふ

最初の実測のときの思いだった。

と休む、何やらむ、こころかすめし思ひ出のあ

岡山大学、新潟大学、東京都立大学の考古学
研究室で研究と教育に携わったが、大学院の入
試の一部に遺物の実測と文章記載も課していた。
ある同僚から、今どきそんなことを課している
のか、と非難されたことがあった。実測の試験
を課していたのは、おもにアングロ・アメリカ
からくる流行のタームや枠組みで理屈の文章を
書いても、基礎資料の認識がおろそかではすぐ
に倒れる、との配慮からであった。

り」と感情に溺れそうになる。何言ってんだ、
分かりっこないんだろう馬鹿な、そんなことはど
うでもいい、サイエンスだ、対象の正確な反映だ、
認識作業だ。

実測のこまごましい意味論はいったいなんだ。
真理は解釈の中ににあるのに。いや真理は細部に
宿る。いや真理は全体である。実測作業をとお
して、製作技法→製作単位→保持→移動くらい
まで見通せる。しかし石器をのこした集団を

実測にこんなに時間をかけて無駄だ、考古学
でもっと他にやることがあるだろう、という非
難はいつもあるが、これは嘘である。「もっと
他にやることがあるだろう」と言う人に限って
「もっと他にやること」もやっていないのだ。人
には無駄な時間がいくらでもあるのでうまく使
い回すのである。むかし野尻湖の陸上発掘のと
き一緒だった堤さんは、昼飯は10分もあれば
済むので、残りの昼休みの時間に出土した石器
を実測していた。

石器の実測に淫してはいけないという忠告も

ある。なるほど。しかし実測をしないアメリカ
の真似をして解釈に走って物から離れてはなら
ない。私がいま書いたことはあるいは間違って

忙しいので夜寝る前に石器を1点だけ実測す
ることを自分に課していたことがあった。時期
の判定ができる二次加工のある剥片の実測な
どをしていると、ふと、この小さな剥離を加え
た時どんな気持ちだったんだろう、子供か、女
か、男か、その時の一瞬の痕跡が時を経て発掘
いるかもしれない。みなさんには、実測から解
釈までのいくつかの階層の階段を上る垂直方向
の営みと共に、地域、日本列島、世界という広
がりの階層も考え、ミクロ作業の実測から巨大
な人類史の時空間に自分の翼を広げて行かれる
ことを強く期待いたします。



旧石器時代に「間接打撃」テクニックは存在したのか ：実験石器製作と岩井沢遺跡の石刃技法との対比から

東北芸術工科大学

金 彦中



石核

1 実験の目的と背景

日本において「間接打撃」という石器製作テクニックが認識され始めたのは1970年代からである(ボルド1971、芹沢編1974)。特に、「真正な石刃技法」を中心として石刃技法 = 「間接打撃」といった考え方が旧石器研究者の間で広まっていったと考えられる。

発達した石刃の出土で知られる山形県岩井沢遺跡の発掘調査報告書では、この考え方の影響をうけ「岩井沢遺跡の「目的的剥片」は、すべてパンチを用いた「間接打撃法(パンチテクニック)」によって作られており、剥離された継長剥片・石刃の打点にはパンチの痕跡が明確に残っている」と述べられている(加藤他編1973p.13)。

その後、会田容弘は岩井沢遺跡の石器製作技術の検討を行い、その石刃生産は「間接打撃」テクニックではなく、石製ハンマーの「直接打撃」によるものであると論じた(会田1992)。しかし、会田は、「遺物の属性分析と実験研究を結びつける必要があり、属性分析の結果を解釈するには、遺物と同じ石材を用いて実験を行い、遺物と対比しなければならない(会田2006 pp.29-30)」と述べ、自らの見解を撤回する。

近年では、大沼克彦や大場正善のように技術的観点から石器製作技術に接近する研究がなされる(大沼・久保田1992、大沼2002、大場2016・2018)。大沼

は、間接打撃法の存在について、以下のように言及する。「考古遺物としてのパンチがほとんど発見されていないことから、私を含めて、間接打撃法の存在に否定的な研究者も少なくない。これにたいして、間接打撃法の存在を積極的に肯定する研究者は、それが直接打撃から押圧剥離法への移行的な技法であったと考えているようである」(大沼2002 p.35)。

このような研究事例以外にも、石器に残された痕跡「フラクチャーウェーブ」を分析することで「間接打撃」を確かめる研究などが行われている(高倉2007)。

上述した通り日本における「間接打撃」テクニックに関する議論は長く続いてきたが、未だ「間接打撃」テクニックの存否に関しては、論理的に検証されているとは言いがたい。また、岩井沢遺跡の石器製作技術の実際も明確にされてない。

本論では、以上のことを踏まえて旧石器時代における「間接打撃」テクニックの存否を検討することを目的とし、以下のような石器製作実験を試みて、岩井沢遺跡の石器群との比較検討を行った。

2 実験の条件と方法

石器製作実験は上述した大沼と大場の実験研究を参考した(大沼・久保田1992、大場2016・2018)。

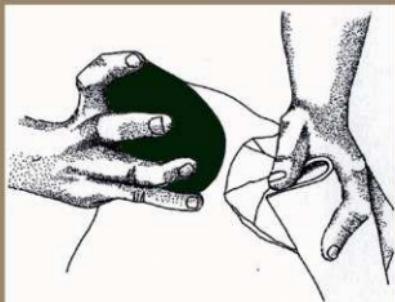


図1 「直接打撃」の一例



図2 「間接打撃」の一例

岩井沢遺跡では石刃に良質な珪質頁岩が用いられているが、それと同様な珪質頁岩（山形県大江町月布川採取）の原石を用いて、それぞれ素材を変えた硬質石製ハンマー、軟質鹿角製ハンマーによる「直接打撃」と硬質石製パンチ、軟質鹿角製パンチによる「間接打撃」の計四種類の打撃法で行う。そして、エコーチップ硬さ試験機（エフティーエス（株）製）で実験に使われる試料（道具や原石など）の硬さを測定した。硬さ測定値の結果から、柔らかい順に、鹿角製のハンマーとパンチ→石核（珪質頁岩）→硬質石製ハンマーとパンチ（安山岩）となった。

また、製作方法として「直接打撃」の場合、石核を左側の足ひざの上に持ちハンマー（石製と角製）を右手に持って石核を加撃し製作した（図1）。「間接打撃」の場合、石核を両足のひざに固定させ石核の打面部にパンチをあて加撃し石刃を製作した（図2）。そして打撃法ごとに石核の交代を含め100点の石刃を作り出して、合計400点の試料に現れる痕跡をまとめた。痕跡は、打面部の打撃痕（クラック）とリップの有無、そして打点からの縦割れと打瘤割れ、横割れなどである（図3）。

この実験と共に、岩井沢遺跡の出土遺物から無作為に石刃100点を取り出して確認される痕跡と比較検証を行った。その際、石器で現れる特定の痕跡の割合をまとめ比較を行うことにした。

3 実験の結果

石器製作実験は2019年10月24日から27日にかけて行った。その結果と解釈は以下の通りである。

直接打撃 「直接打撃」では、硬質石製ハンマーによる「直接打撃」に比べて軟質鹿角製ハンマーによる「直接打撃」の方がよりリップが盛り上がり、打撃痕（クラック）が確認できなかった。ただし、硬質石製ハンマー

による「直接打撃」でも打撃痕（クラック）が見当たらない46%に加え、リップが確認できるパターンが42%確認される。しかし、リップの形が潰れ整っていないことから多少違いはある。他に現れる痕跡としては打面部の消失がある。縦割れは、硬質石製ハンマーの「直接打撃」で11%、横割れは軟質鹿角製ハンマー「直接打撃」で22%見られる。打瘤割れに関しては「直接打撃」の両方に見られるが、割合としては鹿角製の「直接打撃」の方が7%でより多く確認された（表1・2）。

間接打撃 「間接打撃」でも硬質石製パンチに比べて軟質鹿角製パンチの方がよりリップが盛り上がり、打撃痕（クラック）は見当たらなかった。硬質石製パンチによる「間接打撃」では打撃痕（クラック）が28%確認できたが、硬質石製ハンマーによる「直接打撃」の46%と違ってその数が少ないことが分かる。また、「間接打撃」での打面部の消失は、「直接打撃」の結果と違い「間接打撃」では石製パンチ、角製パンチの両方であり確認されなかった。縦割れは、硬質石製パンチによる「間接打撃」で7%、横割れは、鹿角製パンチによる「間接打撃」から26%見られる。打瘤割れに関しては、鹿角製パンチによる「間接打撃」で1%のみであり、その数は「直接打撃」より少ないが石核（石材）より柔らかい鹿角製のハンマーとパンチでより多く確認された（表3・4）。

4 出土遺物の観察

石器製作実験と共に、岩井沢遺跡の石器群の分析を行った。石器は無作為選択した岩井沢遺跡の珪質頁岩製の石刃100点を対象にした。分析は石器製作実験と同様、打面部の打撃痕（クラック）とリップの有無、そして、打点からの縦割れと打瘤割れ、横割れなどの



図 3: 実験試料における各痕跡

直・石 /100 点 ,%	あり	なし	他 (打面部消失)
リップ	50%	42%	8%
打撃痕	45%	46%	8%
縦割れ	11%		
横割れ	7%		
打瘤割れ	2%		
同時割れ	1%		

表 1 硬質石製ハンマーによる「直接打撃」の痕跡

直・角 /100 点 ,%	あり	なし	他 (打面部消失)
リップ	94%	0%	6%
打撃痕	0%	94%	6%
縦割れ	1%		
横割れ	22%		
打瘤割れ	7%		
同時割れ	2%		

表 2 軟質鹿角製ハンマーによる「直接打撃」の痕跡

間・石 /100 点 ,%	あり	なし	他 (打面部消失)
リップ	42%	57%	1%
打撃痕	28%	71%	1%
縦割れ	7%		
横割れ	1%		
打瘤割れ	0%		
同時割れ	0%		

表 3 硬質石製パンチによる「間接打撃」の痕跡

間・角 /100 点 ,%	あり	なし	他 (打面部消失)
リップ	90%	6%	2%
打撃痕	0%	98%	2%
縦割れ	1%		
横割れ	26%		
打瘤割れ	1%		
同時割れ	0%		

表 4 軟質鹿角製パンチによる「間接打撃」の痕跡



図 4: 岩井沢遺跡の出土遺物における各痕跡

遺物 /100 点 ,%	あり	なし	他
リップ	未確認		
打撃痕	66%	26%	6%
縦割れ	4%		
横割れ	3%		
打瘤割れ	2%		
同時割れ	未確認		

表 5 岩井沢遺跡の出土遺物(石刀)の痕跡

実験試料の例



21

図5 「直接打撃」と「間接打撃」に現れる痕跡とハンマー・パンチの素材の相関関係

痕跡を対象とした。この際、トゥールや台形石器など他の石器は分析対象に含めないこととした(図1・2・6、表5)。

5 考察

以上の石器製作実験の結果と岩井沢遺跡の遺物の分析から次のことが明らかになった。現段階で岩井沢遺跡の遺物資料で得られたデータ、特に打撃痕(クラック)を基準に実験試料を比較したところ、より近い数値が表れている表は硬質石製ハンマーによる「直接打撃」の試料である(表1・表5)。それに加え、鹿角製ハンマーによる「直接打撃」と鹿角製パンチによる「間接打撃」の可能性は考えにくいことが分かった(表2・4・5)。

総合的に考えると打撃痕(クラック)と縦割れは、硬質石製ハンマーによる「直接打撃」の痕跡であり、リップの痕跡は、軟質の素材又は鹿角製ハンマーやパンチによる「直接・間接打撃」で表れるのが確実である。そして、出土遺物に対する比較結果から、岩井沢遺跡の石刃・石刃技法は岩井沢遺跡の発掘調査報告書で記述された「間接打撃」の技術ではなく、硬質石製ハンマーによる「直接打撃」で製作された可能性が高い(図5・6)。

また、本稿では触れていないトゥールや台形石器など他の石器にも同じく打撃痕(クラック)と縦割れが確認されており、このことから岩井沢遺跡の石器群は

一般的に硬質石製ハンマーによる「直接打撃」により製作されたと言える。

6 今後の課題

本稿の目的は、岩井沢遺跡の石器群から旧石器時代における「間接打撃」テクニックの存在を検討することにあった。石器製作実験と遺物資料との比較を行った結果、岩井沢遺跡の石器群は硬質石製ハンマーによる「直接打撃」の可能性が高いことが分かった。このことはかつて会田容弘(会田1992)による予察と同じ結果であり、この実験研究により具体的な根拠を持つことになるだろう。今後も石器製作実験のデータを基にして他の旧石器時代の遺跡において「間接打撃」テクニックの存在を確かめる必要がある。

謝辞

本稿の作成にあたり東北芸術工科大学の青野友哉先生に様々なご指導をいただきました。心から御礼申し上げます。また岩井沢遺跡の出土遺物の閲覧をご快諾いただいただけではなく、詳細についてもご教示いただいた山形県うきたむ風土記の丘考古資料館の渋谷孝雄館長と山形県埋蔵文化財センターの大場正善博士に御礼申し上げます。そしてこのジャンルに关心を示され本稿を掲載いただいた堤隆先生、石器の実験製作の立場から貴重なコメントをお寄せいただいた大沼克彦先生に厚く御礼申し上げます。

* 本稿は、筆者が 2019 年度に東北芸術工科大学に提出した卒業論文「山形県における後期旧石器時代前半期の石器生産－岩井沢遺跡の石器製作技術の分析－」の一部に加筆修正したものである。

引用・参考文献

- 会田容弘 1992「東北地方における後期旧石器時代石器群剥片 剥離技術の研究－接合資料をもとにした剥片剥離技術分析の試みー」『加藤稔先生還暦記念 東北文化論のための先史学歴史学論集』pp.209-292 加藤稔先生還暦記念会
- 会田容弘 2006「石刃技法について－東北地方の頁岩製石刃石器群研究のためにー」『第2回東北日本の旧石器文化を語る会 東北日本の石刃石器群』pp.26-32 東北日本の旧石器文化を語る会
- 大沼克彦・久保田正寿 1992「石器製作技術の復元研究：細石刃剥離方法の同定研究」「ラーフィダーン 第Ⅷ巻』pp.1-26 国立大学 イラク古代文化研究所
- 大沼克彦 2002「文化としての石器づくり」35p 学生社
- 大場正善 2016「直接打撃の痕跡－先史時代輕質頁岩製石器資料に対する技術学的理義のためにー」『研究紀要 第8号』pp.1-20 公益財団法人 山形県埋蔵文化財センター

大場正善 2018「間接打撃の痕跡－先史時代輕質頁岩製石器資料に対する技術学的理義のためにーその3ー」『研究紀要 第10号』pp.3-22 公益財団法人 山形県埋蔵文化財センター

加藤稔・米地丈夫・渋谷孝雄編 1973「山形県岩井沢遺跡の研究－小国盆地の旧石器時代－」13p 山形考古学文献刊行会

旧石器文化談話会編 2007『旧石器考古学辞典 第三版』1-307p 学生社

F・ボルド著、芹沢長介訳 1971「世界大学選書023 旧石器時代」34p 平凡社

芹沢長介編 1974「古代史発掘1 最古の狩人たち」58p 講談社

高倉純 2007「北海道遠軽町奥白滝1遺跡出土石器群における剥離方法の同定-石刃・細石刃剥離方法の同定とその意義に関する一考察-」『古代文化』58-IV pp.98-109 古代学協会

M・L・イニザン、H・ロッシュ、J・ティキシエ著、大沼克彦・西秋良宏・鈴木美保訳 1998『石器研究入門』1-148p クバプロ

Comment

金彦中 論考「旧石器時代に「間接打撃」テクニックは存在したのか」について

国立大学名誉教授 大沼克彦

本研究の目的は「旧石器時代における「間接打撃」テクニックの存否を検討すること」にある。金氏はその目的に向け、硬質石製ハンマーと軟質鹿角製ハンマーを用いた直接打撃、および、硬質石製パンチと軟質鹿角製パンチを用いた間接打撃によって 100 点ずつ、都合 400 点の石刃を実験製作し、この 4 群の実験製作石刃に残る特徴を山形県岩井沢遺跡出土の石刃上の特徴と比較した。実験製作に使用した石材は山形県月布川産の珪質頁岩原石で、岩井沢遺跡出土石刃の素材となった珪質頁岩と同様なものである。

金氏は自ら実験製作した 4 群の石刃にみられるリップ、打撃痕、縦割れ、横割れ、打瘤割れ、同時割れの比率をそれぞれ記録したのち、これらの比率と岩井沢遺跡出土石刃にみられる比率を比較・

検討して、岩井沢遺跡の石刃が硬質石製ハンマーによる直接打撃で剥離された可能性が高いという結論に到達した。

本研究で用いられた 4 群の実験製作資料と考古資料はすべて 100 点を数え、量的に十分であり、導かれている結論は説得性を有している。

惜しまれるのは「目隠しテスト」がおこなわれなかったことである。個体毎ではない、グループ毎の「目隠しテスト」の実施はより高い説得性をもたらすと思う。

いずれにせよ、実験製作物と考古遺物の比較・検討をとおして間接打撃の存否という旧石器研究の未解明課題に迫ろうとする本研究は大いに評価すべきものであり、研究の一層の進展を期待するところである。

人類がたどってきた道

“文化の多様化”の起源を探る

海部陽介 [著]

2005年

NHK出版

NHKブックス 1028



旧石器時代を学ぶためにはどんな本を読んだらよいのだろうか？

ここではそんな読む本に迷っている初学者のみなさんにおすすめの本を2冊ご紹介したい。

まず1冊目は海部陽介氏の『人類がたどってきた道—文化の多様化の起源を探る—』である。旧石器時代をより広い視点でみることができるようになる。

旧石器時代を研究する学問は考古学だけではない。本著では古人類学、遺伝人類学、考古学の成果を中心に、人類進化の過程を解き明かそうと試みる意欲的な本である。舞台は日本だけではなく、アフリカやヨーロッパ、アジア、アメリカ、オーストラリアなど全世界に亘る。

現在、人類はみなアフリカで誕生・進化し、世界へ拡散したとするアフリカ単一起源説が定説となっているが、本著が執筆された当時は、アフリカからユーラシアへ広がった原人が、各地で分化・進化し、それぞれの土地の現代人の祖先になったとする多地域進化説がまだ存在感をもつ時期であった。本著では、アフリカ単一起源説が有力となっていた理由や経緯が説明されている。

また、我々現代人は生物学的にはホモ・サピエンスに分類されるが、我々と同じ種の当時の人々が現代の我々のような能力や行動パターンをいつ頃兼ね備え、それまでの人類ではなしえなかつた世界への拡散をどのように実現していったかについて

石器研究法

竹岡俊樹 [著]

1989年

言叢社刊



著者は1950年生まれ。
旧石器考古学専攻。
パリ6大学博士課程修了。
日本女子大学ほかの講師を歴任

描き出している。

本著はホモ・サピエンスの拡散過程という、現在も世界の旧石器研究で旬な話題となっているテーマについて、専門性を損なわずにわかりやすく学ぶことができる。なお、人骨や考古学的記録については次々と新しい成果が出てきているため、現在は状況が異なるものもある点には注意。

※

2冊目に竹岡俊樹氏の『石器研究法』をご紹介したい。石器の基本を学ぶことができる。

旧石器時代は石器が主な資料となるため、石器からどれだけ有効な情報を引き出せるかが重要となる。本著は、石器の長さや剥離角などの計測方法、各名称や分類方法など、石器の基本的な取り扱い方を体系立てて学ぶことができるテキストである。前半では石器製作に関する基礎的な分析方法について述べられ、後半では遺跡間の比較方法や具体的な分析事例が載せられている。特に前半部分では、図を多用してわかりやすく基本的な事項が説明されている。

筆者も旧石器の勉強を始めた頃にこの本をコーヒーシー、同じく石器を学んでいた者同士で集まって勉強して覚えた記憶がある。この本を片手に石器の観察や分析を行うと、石器の基礎を体系立てて学ぶことができるだろう。

以上2冊、まだ読んでいなければぜひ熟読をおすすめしたい。

Palaeo Reference

高屋敷 飛鳥

Text by Asuka Takayashiki

Research Design

技術組織・痕跡分析・地域研究

新潟県教育庁文化行政課 世界遺産登録推進室

沢田 敦

上／平道跡C地点の鄭剣刀形石器と鄭剣刀削片（沢田はか 1996）

どのような研究デザインをもって自らの考古学を開発するのか。多くの研究者が頭を痛めている問題だと思う。ここではまず、筆者の研究の目的と方法を紹介し、次に研究の方向性が固まった学生時代から30歳頃までを振り返ることで、その研究デザインを紹介したい。

筆者の旧石器時代研究の目的は、当時の人類の行動と環境との関係を議論し、さらに幾ばくかの一般的説明をおこなうことである。不安定な氷期の環境のなか、限られた技術で生活する人類が主役の当該期研究において、両者の関係が最も重要なテーマだと考えるからである。そして、共時的・通時的研究によるその関係の特質や人類進化との関わりについての議論が一般的な説明にあたると考えている。

分析方法の核となるのが、標題に掲げた技術組織と痕跡分析である。技術組織は、1970年代後半にL.R. Binfordが提起し、石器については兵站・補給（石材獲得）、製作技術、機能、維持・消費、廃棄の諸要素が組織化されたあり方と説明された（図1）。筆者は、技術組織のあり方を人類の環境適応の手段とみなしその全体と環境との相関をあきらかにするため、兵站から廃棄までのすべての諸要素を分析対象とする。中でも使用痕分析による機能構造の解明を重視し、近年は、製作や運搬など機能以外の要素と関わる微視的な痕跡

石器をめぐる技術的組織

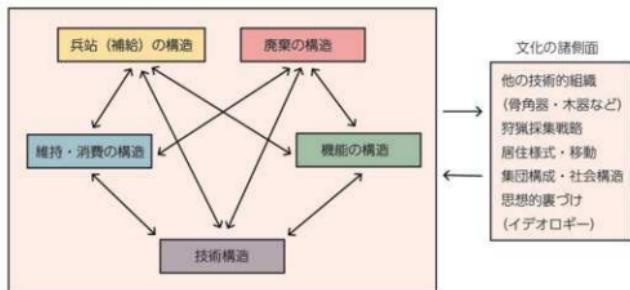


図1 石器群をめぐる技術組織のモデル（阿子島 1989）

技術組織とは、技術を組織化されたものとみなす枠組みである。この図は、石器の技術を諸要素が相互に関係性を持つ組織とする技術組織モデルで、技術組織は「文化の諸侧面」を介して、さらに、その外部にある環境と関係する。



図2 使用痕の観察

金属顕微鏡（100～500倍）、実体顕微鏡（100倍以下）、デジタル顕微鏡などで石器の表面を観察する。

にも対象を広げている。

痕跡分析は、顕微鏡による観察と解釈のための実験を枠組みとするが（図2～4）、最近は、位置や重複など各種痕跡の関係性に注視し、実験結果と痕跡相互の関係性とを総合することで解釈の妥当性を検証するようしている。そして、観察より上位となる研究諸段階においても、全体の整合性を意識している。

筆者は、学生時代の数年間、宮城県の前期旧石器がねつ造された遺跡の調査に参加していた。そこでの事については己の不明を認め、その反省から、その後の研究に



上／平遺跡 C 地点の彫刻刀形石器と彫削刀削片（沢田ほか 1996）



図3 石器の使用実験（イノシシの生皮なめし）
対象物（皮、木、骨角、肉など）や操作法（切断、削りなど）、
作業量（ストローク数や時間）の条件を変えた多数の実験
をおこない、観察された使用痕から解釈基準をつくる。

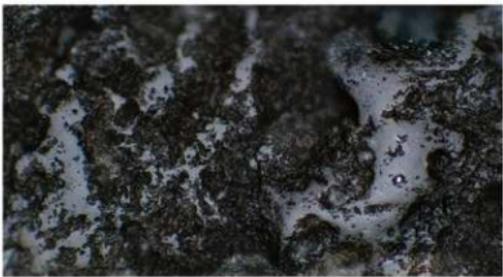


図4 実験石器に形成された微小光沢面
スギ sawing (锯引き) 3000 ストロークで、
珪質頁岩製削片刃部に形成された木特有の微少光沢面 (断面が丸く、表面
はなめらか)。200倍の顕微鏡写真 (写真上 1cm の実寸 50μm)。

おいては、不都合な事象や説明できない事象を放置しないこと、多様な事象を照合して全体の整合性を意識することを心がけてきた。このことも筆者が関係主義的な研究を指向する背景となっている。

筆者は、1983年に東北大学に入學し、卒論のテーマは山形県上三野A遺跡の石器製作技術であった。技術といつても刃部再生に関心があったので、修論では使用痕分析をテーマとした。卒論構想発表のため論文を漁った際、定番の三神峯遺跡のほか、山形県砂川A遺跡出土石器の刃部再生に関する論文、埼玉県砂川遺跡の破損ナイフの再加工・再利用例をみつけたことが、刃部再生に関心を持つきっかけとなった。

新潟県教育委員会に就職したのは1991（平成3）年のことである。幸運にも、就職2年目から3年間、上ノ平遺跡・吉ヶ沢遺跡を調査する機会を与えられ、1994年に上ノ平遺跡A地点の報告書を刊行した。道具類や彫刀面再生削片が多数出土する一方で、石刃生産の証拠のとぼしい石器群は、技術組織の視点による解釈にうってつけで、そのまとめ文章は筆者の研究にとってのマイルストーンになった。

上ノ平遺跡の分析において筆者は、身近な資料の分

析が海外の旧石器研究が議論しているような巨視的な課題につながっていることを実感できた。新潟のありふれた一石器群も、歐州の著名な遺跡の石器群も、人類の軌跡としては等価な一事例なのである。こうして痕跡分析を中心とした技術組織研究を核とする地域研究、そして、その比較・総合による一般化という研究フローを意識するようになった。一般レベルの議論は、まだ道半ばなのが現状ではあるが、それを見据えながら今後も筆者のフィールドである新潟県域とその周辺で資料分析を続けていこうと考えている。

今、あらためて振り返ってみると、筆者の研究デザインは、地域資料の分析の方法や分析から得られた課題とそれへの対処を、自分なりに考えながら形成されたものだと思う。地域研究に根ざして、巨視的・世界的テーマに取り組む仲間が増えたらいいなあ、と願っている。

引用文献

- 沢田敦ほか 1996 「上ノ平遺跡C地点」 290P 新潟県教育委員会
阿子島香 1989 「石器の使用痕」 95P ニューサイエンス社

研究ノート

長野県御代田町宮平遺跡採集の石器

大正大学 両角太一



1 はじめに

ここに紹介する資料は、2019年8月24日に行われた日本旧石器学会の旧石器基礎研究・次世代育成研究グループ（通称パレオ・ラブ）において、御代田町宮平遺跡の踏査を実施した際に採集した石器である。採集地は、長野県北佐久郡御代田町大字豊昇字宮平1724-3番地である。

遺跡は、1万数千年前の浅間山の軽石流堆積物の基盤上にあり、眼前を湯川が開析する深い「田切り地形」上に立地し、標高約800mを測る。遺跡の背後には森泉山系が続く（図1）。

遺跡の存在は明治期の村誌に登場し、昭和に入るとN.G.マンローヤ、八幡一郎等の著名な考古学者も度々調査に訪れたことで広く知られている。戦後は何度かの学術調査や緊急発掘により、縄文時代中期末から後期初頭にかけての住居址や土器が多く発見されている（提編2000）。

本稿では、採集資料の観察と類似資料との比較等から帰属時期や機能的位置付けを検討したい。

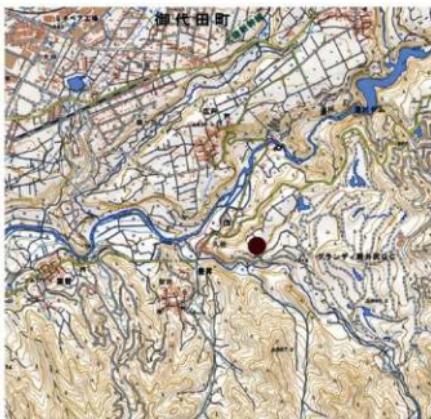


図1 宮平遺跡の位置

2 採集した石器

本資料は、ガラス質黒色安山岩を素材とし、表面は若干の風化が認められる。

平面形は、先端から脣部が緩やかに外湾し、基部はやや内湾した逆三角形状を呈する。なお、以下、基部途中の屈曲するところから基端までを「茎部」という。

縦断面は、腹面（図2右）が膨らみを持つ半月形で、横断面は凸レンズ状を呈す。

最大長24.5mm、最大幅16.0mm、最大厚5.0mm、茎部最大幅5.5mm、重さ1.5gを測る。色調は、N3/4暗灰である。

剥離は中心に向かって連続的に施され、形状はややばらつきがある。背面中央左には大きな剥離面が残り、おそらく素材剥片の背面と思われる。

3 考察

3-1 形態的特徴について—有舌尖頭器か有茎石鏃か—

本資料は形態上、有舌尖頭器または有茎石鏃に分類されると考えられるが、表採資料であるため層位的に時期が確認できないことから、両形態と比較し、そ

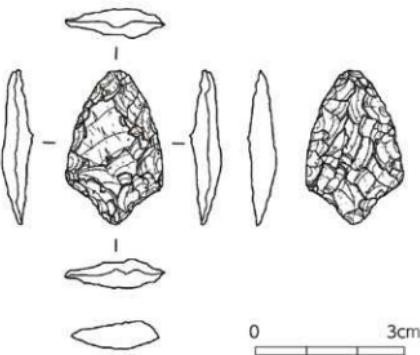


図2 宮平遺跡採集の石器

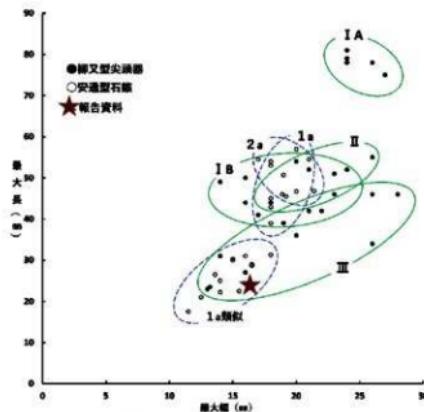


図3 柳又型尖頭器と安通型石鎌の最大幅・最大長の比較
の位置づけを検討することにしたい。

有茎石鎌のなかで、群馬県北部地域の縄文時代後期から晩期に出現し、安通・洞No.2遺跡の資料を指標に「安通型」とする型式がある（大工原2017）。本資料は凸基有茎という点で類似するため当該型式に属する可能性がある。また、安通型石鎌は、柳又型尖頭器（小林1967）と形態的に類似するものが一部存在する。小型の有舌尖頭器は矢尻としての機能を有していたとする指摘（織笠2002、藤山2003、橋詰2015）もあり、両者は形態、機能ともに近い要素を有する可能性がある。

以下では、柳又型尖頭器の示準的な資料26点（小林1967）と、遺存状態の良好な安通型石鎌とその類似資料の計27点（大工原2017）を分析対象として、形態的諸属性を比較することで両者における差異が見出せるか試みる。なお、安通型石鎌の1b、2b形態は資料数が少ないので含めていない。

大きさ 柳又型尖頭器と安通型石鎌（類似資料を含む）の最大幅と最大長から比較を行った（図3）。計測は、柳又型の資料は報告データ記載の完形時の推定値を使用し、安通型の資料のうち完形品は記載データを、欠損品は筆者が計測した完形時の推定値を用いた。また、形態ごとに線で囲い、分布範囲を示した。

これによると柳又ⅠA型のみが単独で独立しているが、その他は混在した状態を示した。また、安通型石鎌は、最大長35mm、最大幅17mmを前後して明確に二分する様相を示した。

茎部幅 次に、各種形態の基部の最大幅から箱ひげ図を作成して比較を行った（図4）。計測は、それぞれ文

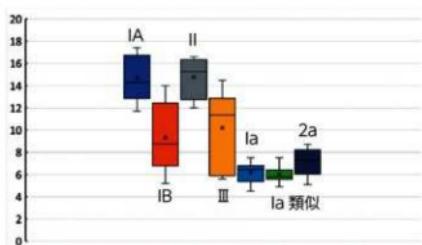


図4 柳又型尖頭器と安通型石鎌の茎部幅の比較

献記載の実測図から行い、茎部が明瞭な資料を対象とした。

柳又ⅠA型とⅡ型は11.7～17.4mmまでの振れ幅に収まり、他の要素も近い値を示した。また、Ⅲ型は振れ幅が5.6～14.5mmと最も広いが、箱はⅠB型と近い傾向がある。これは図2の最大幅の近さと対応関係にあることが伺える。

安通型石鎌は1a形態と1a類似形態で長さ、幅とともに二分する関係にあるが、両者とも茎部幅はほぼ同じ様相を示す傾向にある。2a形態はやや幅広である。

分析結果として柳又型は大きさと茎部幅が相關するものの、安通型では相關しないことが理解できた。この要因として石器製作における製作意図の違いがある。前者は、石器の大きさなどにより、茎部幅が変化するのに対し、後者は大きさに違があるが、茎部幅は変化せず製作される。これは、基部の剥離面数の違いにも表れている。

基部の剥離面数 基部が残存する資料について、基部の剥離面数の比較を行った。方法は、実測図のある資料の片面のみを対象に数えて数値化した。

その結果、柳又型は剥離面数が平均8.4個であるのに対し、安通型は平均15.1個であった（表1）。この観点からすると安通型の場合は柳又型より約2倍の仕事量で基部の作出を行っているといえる。

形態的特徴からみた器種 本資料の観察では、基部の剥離面数は少なくとも14個あり、安通型の平均値に近いことが読み取れる（図5）。

安通型石鎌は、基部形状から凸基を1a、平基に近く茎の作出が明瞭な2a形態を主とし、それぞれ大きさ等の諸要素が異なる亜種をb類と設定している（大工原2017）。

これに基づくと本資料は、1形態に類似する。加えて、宮平遺跡は安通型の分布圏（大工原2017）とも近傍で

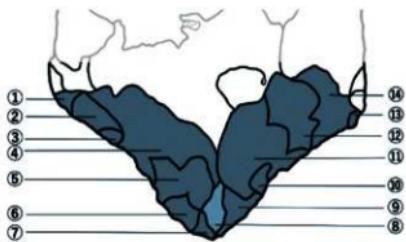


図5 採集資料の基部作出における剥離面数

時期	住居址	グリッド出土の土器
中期中葉	0	5
中期後葉〔加曾利E2・3〕	8	22
中期末葉～後期初頭〔加曾利E4～森名寺〕	6	22
後期前半〔巣之内1・2〕	3	36
後期後半〔加曾利B1～3〕	0	0
晚期初期〔大崩B〕	0	1
不確定	13	0

図6 宮平遺跡の住居址とグリッド出土土器の時期
(堤編 2000 より作成)

あることなどからみると、当該型式と関連する可能性が高いとみてよい。

3-2 帰属時期について

昭和56・57年の調査(堤編2000)では、住居址は縄文時代中期後半から後期前半に属するが、グリッドから出土した土器片202点のうち、後期後半(主に加曾利B式)の土器群が91点、晚期(大崩B式)の土器が1点出土しており、後期後半から晚期の土器が約半数を占める点で住居址のそれとは対応しない(図6)。恐らく、比較的上層に位置する後期後半から晚期の遺構が農機具等による搅乱を受けたことで残存していないことが要因であり、住居址のみの年代観で本資料を位置づけることはできない。

本資料を形態から見ると、前項に述べたように安通型石鎌に近く、当該型式の帰属時期は後・晚期である。これは宮平遺跡の年代観とも重なる部分があるため、本資料は後・晚期に帰属する可能性が高く、先の分析結果を支持するものとなった。

3-3 石材

宮平遺跡の半径約2km圏内には、八風山遺跡群をはじめとするガラス質黒色安山岩原産地が存在している(図7)。踏査初日の23日、同研究グループで八風山第

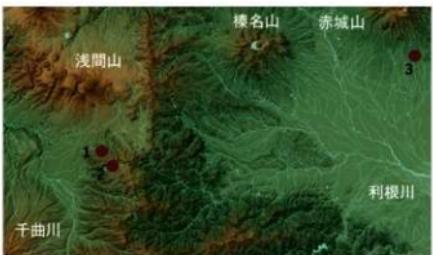


図7 宮平遺跡と周辺遺跡

1 宮平遺跡 2 八風山遺跡群 3 安通・洞No.2遺跡

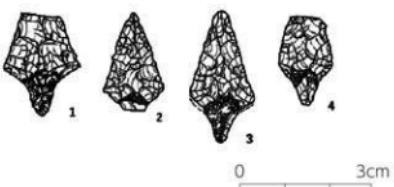


図8 着柄痕のある凸基有茎鎌

Ⅷ遺跡を訪れた際に、付近の河川で採取したガラス質黒色安山岩のサンプルと本資料の色調が近似しているため八風山起源の石材を用いている可能性が高い。

3-4 機能

上記の比較により、安通型石鎌の場合、その大きさに限らず、茎部の幅が一定の様相を示す傾向にあることが確認された。ここでは、この現象についてどのように解釈できるかいくつかの觀点から検討を試みる。

着柄痕跡から 図8の資料は、安通・洞No.2遺跡出土の着柄痕跡のある石鎌で、付着物は不明である(並木・阿久澤編2013)。付着物のある範囲が柄との接触範囲とすると、平面部分の付着物は胸の近くに及ぶため、U字状の切れ込みを入れた柄に差し込むようなかたちで着柄されたと考えられる。1は茎部全体に着柄痕跡が残る資料である。2~4には茎部を中心に着柄痕跡を切る剥離が見られる。これらは柄から外れた後に修正加工を加えたことを示す資料である。また、4は着柄痕跡を切る調整剥離が基部に及び、肩が丸みを帯びている。これは着柄している状態、あるいは、着柄していない状態の両方で調整が加えられた可能性がある。

そのため、安通・洞No.2遺跡出土の石鎌に、一連のメンテナンスにより形態が変更されている資料が含まれていないか、注意して観察しなければならない(図

表1 柳又型尖頭器と安通型石錐のデータ

形態	縦 (mm)	横 (mm)	幅 (mm)	縦幅大長 (mm)	縦幅厚 (mm)	茎部 縦 (mm)	茎部 横 (mm)	茎部 幅 (mm)	安通型石錐		TCSA (2017)	基部 到達 面数 (大工 面数)
									形態	縦 (mm)		
IA型	24	(79)	5.5	16	8	第1回1			I.a	189	(46)	5.1
	24	(81)	5.9	14.3	8	第1回4				192	(45.5)	6.1
	26	(78)	5.5	14	8	第1回5				18	(42.9)	5
	26	(78)	4.4	17.4	8	第1回4				18	49	5.9
IB型	16	(44)	6.4	7.5	5	第1回6			I.b	19	(50.7)	7
	16	50	1	9	5	第1回7				18	51	5.6
	21	(52)	4.4	14	9	第1回8				18	45	6.4
	24	(52)	4.7	11.9	8	第1回9			I.b類似	18	31.3	6.3
II型	14	(49)	8.5	7	5	第1回10				16	31	4.9
	17	(41)	3.5	5.2	5	第1回11				15	30	4.5
	20	54	5	15.5	5	第1回12				15	30.3	5.7
	18	(44)	4.4	7	5	第1回13				16.5	29	5.3
III型	26	55	6.3	16.6	5	第1回14				13.6	26.5	5.1
	23	51	6.4	12	5	第1回15				16.5	26.7	4.7
	25	46	5.9	15	5	第1回16				19	27	4.7
	13	(23)	5.2	9	5	第1回17				13.2	25	4.7
Ⅳ型	16	27	4.3	10.7	4	第1回18				14	25	3.8
	14	31	3.8	5.6	7	第1回19				14	22	3.8
	20	36	4.2	12	11	第1回20				15.5	22.5	4.9
	19	(39)	5.1	—	—	第1回21				12.5	21	4.9
Ⅴ型	21	(42)	5.9	—	—	第1回22				11.5	17.5	4.6
	28	(46)	6.4	8	5	第1回23			2a	21.4	(46.8)	5.6
	22	42	2.7	12.3	12	第1回24				18	(53)	6
	26	(46)	5.9	14.5	12	第1回25				20	57	6
平均値	26	34	7.2	—	10	第1回26				17	(54.5)	5
										20	(46.7)	6
								平均値			44.738	15.05

※前半括弧は()内に表示。

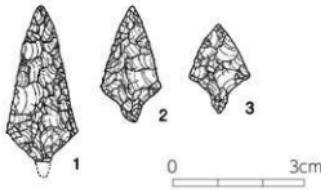


図9 安通・洞No.2遺跡出土の石錐



図11 報告資料の使用痕跡

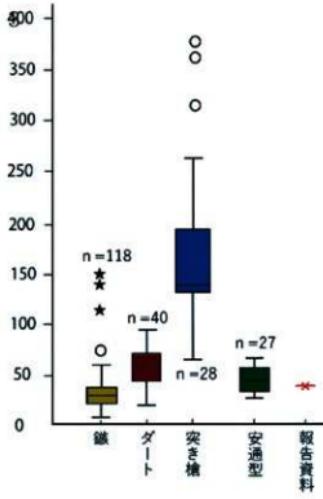


図10 TCSAの箱ひげ図 (Shea2006に加筆)

9)。また、着柄時に再調整が加えられた場合も想定されるため、大型品に比較的優品が多いことを技術的な熟練度の差異としてよいかは検討が必要である。このような付け替えや再調整が見られる背景には、茎部や柄が壊れやすく、着柄しなおす必要性が大きかった可能性も考えられる。

TCSAから ここではTCSA値 (Shea2006) を安通型石錐と報告資料に適用して検討を行った (図10)。なお、「石器の計量的属性による狩猟具の判別法は、すべての刺突用石器の用途を正確に判別するものではない」(御堂島 2015)ため、多角的な検討が求められるが、ここではTCSAを分析対象が何の道具として、機能的なポテンシャルを発揮するかという観点から検討する。

分析の結果として安通型石錐 27 点のTCSA値は平均45、標準偏差12、最小値26、最大値67となり、錐とダートの双方に機能性を示す値となった。

報告資料のTCSA値は40で、ダートと錐の箱の中間に位置するが、より錐の平均値に近い値を示した。

使用痕跡から 本資料は先端が欠損し、腹面先端には縦方向からの小さなステップ状の剥離が集中する。これは、投射時の衝撃剥離（御堂島 1991）に含まれる可能性があるものの、典型的な衝撃剥離痕跡ではないため、ここでの判別は困難である（図 11）。

腹面の基端には、縦方向の剥離がある。これは投射時、矢柄からの圧力で起こる剥離に含まれる可能性も想定されるが、他の主要な剥離面と比べてフレッシュな面を有しており、時間的な開きがあると見られるため農工具などとの接触による剥離痕跡の可能性が高い。
本資料の機能的位置づけ 本資料は背面に大きな素材剥離面が残り、平面形状からも繰り返し調整が行われた形跡は見られないため、安通・洞 No.2 遺跡の石鎌に見られるような繰り返し再利用された可能性は低い。

着柄方法は、本資料は比較的茎部の突出が弱く、前述した着柄痕跡の残る資料から想定されるように、柄にU字型の切り込みをいれて挿む方法が想定される。

使用痕跡からの機能推定は困難であるが、TCSA の分析では鎌の平均値に近いため、鎌として用いられたと考える方が妥当と思われる。しかし、安通型石鎌の TCSA 値はダートと鎌の両方の値の範囲に入ってしまっており、大型品と小型品の分化現象（図 3）と関連して両義的な存在であった可能性がある。

4 おわりに

本稿では、報告石器と類似形態を有する石器の諸属性を比較することから帰属時期を検討し、定量的分析や使用痕跡から機能的解釈を試みた。実測図やデータ処理など至らない部分も多々あるが、比較的触れられることのなかった縄文石鎌の特徴を垣間見ることができたのではないかと思う。

安通・洞 No.2 遺跡の石鎌には被熱痕跡のあるものが一定数存在することから、加熱処理（御堂島 1993a・b 他）や、着柄痕跡の形成過程に関わる問題として検討していく必要がある。また、安通型石鎌は限定的な地域と時期に出現し、形態的にも特異であることから祭祀に関する解釈がなされているが、筆者は使用対象や方法などの観点から改めて検討を試みたい。

謝辞

執筆にあたり、大正大学の御堂島正先生には多くご教授いただきました。また、大学院生の滝沢勇馬氏には入学当初から石器実測のご指導をいただきました。パレオ・ラブを主宰する堤隆先生には執筆の機会をい

ただくとともに、多くのご教示と励ましの言葉で背中を押していただきました。厚く御礼申し上げます。

石鎌というと、小学生の頃に縄文クラブという講座で地元の上之段遺跡へ表面採集に訪れ、夢中になって探しすることが思い出されます。中学、高校と部活動に打ち込んだ私は、既に考古学とは無縁の存在となっていました。しかし、進路に迷っていた高校 3 年の秋、気晴らしにと八ヶ岳山麓の考古館を巡る見学会に参加したところ、ある方に藤森栄一著作の「古道」という本を教えていただいたことが本格的に考古学の道に進むきっかけとなりました。

この数年、大正大学考古学研究会、及び大学の枠を超えた研究会の場において、奇跡的な出会いに恵まれ、多くの方々に支えられながら学ぶことができています。この場をお借りして厚く感謝申し上げます。

引用文献

- 織笠 昭 2002 「花見山型有茎石鎌・有茎先頭器形態論」『地域考古学の展開—村田文夫先生還暦記念論文集—』13 - 31 頁
小林 達雄 1967 「長野県西筑摩郡開田村柳又遺跡の有舌尖頭器」『信濃』19-4 25-32 頁
大工原 豊 2017 「安通型石鎌の研究—群馬地域の後・晚期の石鎌式一」『石鎌を中心とする押圧剥離系列石器群の石材別広域編年の整備』64-78 頁
堤 隆（編）2000 「宮平遺跡」長野県御代田町教育委員会並木勝洋・阿久澤智和（編） 2013 「安通・洞 No.2 遺跡」前橋市教育委員会
橋詰 潤 2015 「後期更新世末期の本州中央部における両面加工狩猟具利用の変遷」『第四紀研究』54-5 235-255 頁
藤山 龍造 2003 「石鎌出現期における狩猟具の様相—有舌尖頭器を中心として—」『考古学研究』50-2 65-84 頁
御堂島 正 1991 「石鎌と有舌尖頭器の衝撃剥離」『古代』92 79-97 頁
御堂島 正 1993a 「石器製作における加熱処理」『二十一世紀への考古学』櫻井清彦先生古稀記念論文集 3-14 頁
御堂島 正 1993b 「加熱処理による石器製作—日本国内の事例と実験的研究—」『考古学雑誌』79-1 1-18 頁
御堂島 正 2015 「ダートか矢か—石器の計量的属性に基づく狩猟具の判別—」『神奈川考古』51 1-20 頁
Shea, J. J. 2006 The Origins of Lithic Projectile Point Technology: Evidence from Africa, the Levant, and Europe, *Journal of Archaeological Science* 33: 823-846.

両角太一論考「長野県御代田町宮平遺跡採集の石器」に接して

新潟県立歴史博物館 橋詰 潤

参考可能な情報に制限のある、単独出土や表探の石器の位置付けに悩むことは多い。今回、堤隆さんが主催する通称パレオ・ラブの遺跡踏査で手にした石器（以下、本資料）を基にこの課題に取り組んだ研究を、出版前に拝見する機会をいただいた。同郷出身の新しい研究者の芽が伸び、それを育てる土壤が育まれていることに喜びを感じながら、いくつかコメントさせていただきたい。

本研究では、有茎の類似形態である柳又型有舌尖頭器（以下、柳又型）、安通型石鎌（以下、安通型）と比較することで、本資料の位置付けを探っている。長さや幅、平面形に加え、茎部幅、基部の剥離面数などを比較し、本資料は安通型に近いと推定した。多角的な視点を採用しており、その試みはおおむね成功している。さらに分析を進め、サイズを超えて存在する安通型の茎部幅の一定性について機能論的観点から検討している。ここでも安通・洞No.2 遺跡出土土石鎌の着柄痕や使用痕（欠損痕跡）、TCSA（先端部横断面面積）など多角的な視点が用いられている。結果的に茎部幅の一定性の理由は解明されなかったが、大小の

異なるサイズの存在から、安通型はダートと鎌の両義的存在だった可能性を指摘している。一点の石器から始める研究の基本に忠実ながら、多角的な視点を取り入れており、その結果も興味深い。

多少の注文をつけるなら、本資料をいきなり柳又型や安通型と比較するのではなく、まずは発掘資料と比較した方が良かったのではないかだろうか。結果として、本資料と対比可能な形態は発掘資料には存在しないので、両形態との比較は適切であった。であるなら、3-1と3-2をの記述の順番を入れ替え、発掘資料による本資料の位置付けは難しいので他の類似形態と比較を試みた、と論を進めた方がより理解しやすかったのではと感じた。

今後追究して欲しい課題も残されている。サイズ差を超えて存在する、茎部幅の規制の要因、安通型の分布範囲を外れて存在し、この形態では一般的でない石材を用いている本資料の評価などである。課題が多いのはマイナスではなく、本研究のテーマが高い発展可能性を有していることの裏返しでもある。今後の展開が楽しみであり、研究の進展に注目していきたい。

【Keyword】 八風山ガラス質黒色安山岩原産地

国境の長いトンネルを抜けると、群馬から長野へと上信越自動車道はに入る。このトンネル名ともなっているのが八風山である。トンネル出口の広い車両用スペースは、尖頭器の製作址である下茂内遺跡として高速道路建設に先立って調査がなされた。

八風山は、佐久市香坂と軽井沢町の境に位置し、長野と群馬の県境にもあたり、ガラス質黒色安山岩原産地としてもよく知られている。

この地域には、下茂内遺跡の他、後期旧石器時代初頭の石刃遺跡である八風山Ⅱ遺跡、後期旧石器時代後半の尖頭器製作遺跡である八風山VI遺跡など八風山遺跡群が存在し、重要な原産地遺跡群である。



図1 パレオ・ラブによる八風山原産地の踏査

旧石器辞典

【荒屋型彫刻刀形石器】

明治大学 小野寺優斗

【定義】

彫刻刀形石器¹⁾の一型式。新潟県荒屋遺跡出土の彫刻刀形石器を示準とする。

定義は研究者によって微妙に異なるが、少なくとも次の要件を満たす石器である。すなわち、素材となる剥片の周辺に急斜度調整(①)を施し、その先端から左肩にかかる縁辺に桶状剥離(②)を施して彫刻刀面(③)を作出した石器である。

【技術・形態】

示準となる新潟県荒屋遺跡出土の彫刻刀形石器は、当初芹沢長介により3形態に分類されたが(芹沢 1959)、加藤学によれば、今日ではそれら全てを荒屋型彫刻刀形石器とする認識が一般的とされる。共通する特徴として、(1)素材となる剥片の周辺に急斜度調整を施し、先端部を尖頭器状に上げる、(2)先端部から左肩にかかる縁辺に桶状剥離を施し彫刻刀面とする、(3)彫刻刀面の打点付近にノッチ状の加工が施されるという点などが挙げられる(加藤 2003)。また、腹面基部に入念な加工(4)が施される事例もみられるほか、フラットグレーバー状剥離(5)と呼ばれるものが彫刻刀面から石器のおもて面にかけてなされる場合も多い(綿貫・堤 1987)。石材は珪質頁岩が特に

多く用いられるが、黒曜石で代替される事例も北海道の黒曜石産地近辺ではみられる。

【機能】

「彫刻刀」と聞くと先端部で溝を掘る道具というイメージが強い。しかし使用痕観察に基づくと、先端ではなく彫刻刀面の側縁などを用いている事例が数多い。埼玉県深谷市白草遺跡の彫刻刀形石器21点の使用痕分析では、先端部ではなくファシット腹面(彫刻刀面と腹面のなす縁辺)での使用が19点にみられ、ファシット腹面を用いた骨角の削りが想定された(堤 1997)。また、荒屋遺跡の彫刻刀形石器の使用痕分析では、基本的には骨・角の削りと乾燥皮なめしの2つの作業に用いられたと推定された(鹿又 2003)。いずれにしても集団の生業と強く結びついた機能を示していると考えられる。

【時期】

後期旧石器時代後半期の細石刃石器群段階

【分布と組成】

北方系削片系の細石刃石器群に伴うことから、一般に東北日本を中心として分布し、岡山県恩原遺跡でも確認されて、その南下を示している。また、シベリアのバイカル湖周辺やアラスカでも同形態の彫刻刀形石

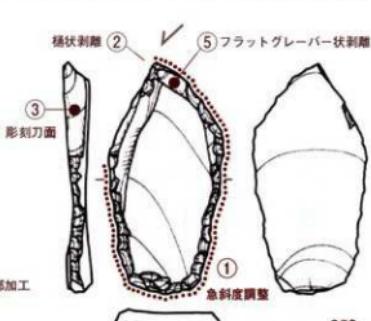
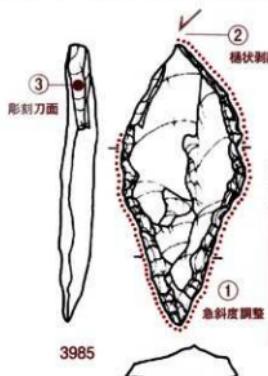


図1 荒屋型彫刻刀形石器 (1:1) (東北大学考古学研究室 2003)



図2 日本列島における荒屋型彫刻刀形石器の分布

器が確認され、広範なその分布がうかがえる。一方、非削片系の細石刃石器群をもつ長野県矢出川遺跡では、2000点以上の細石刃が出土しているにもかかわらず、荒屋型を含めた彫刻刀形石器を組成しない点で対照的である。

【研究歴史】

1958年、芹沢長介によって新潟県荒屋遺跡の発掘がおこなわれた（芹沢1959）。第1次調査では細石刃676点、「舟底形細石刃核」24点などに加え、401点の彫刻刀形石器および1012点の削片が共に発見された。長野県矢出川遺跡で確認された細石刃石器群と大きく異なるその組成に加え、当時類をみない数の彫刻刀形石器と削片に特殊性を認めた芹沢は、荒屋遺跡出土の彫刻刀を3形態に分類し、そのうちの一つを「荒屋型彫刻刀」と命名し他と区別した。しかし荒屋型彫刻刀形石器の定義は芹沢自身の著作内でも揉れがみられ²⁾、他の3形態全てにも認めるとの認識が水村孝行によって示される（水村1977）。その後、荒屋型彫刻刀形石器を定義する明確な要素の必要性が主張され（山中1982）、認定のための必要条件が提示された（綿貫・堤1987）。

以上のような型式学的分類に加え、特に90年代以降になると石器に残された使用痕を分析する研究もさかんになり、彫刻刀形石器の機能の見直しがはかられるようになる（堤1997・鹿又2003）。また、着柄に

関する言及もなされ（山科2002など）、総括的な理解も示されている今日である（加藤2003）。註

- (1) 「彫器」・「彫刻刀」ともいう。芹沢は「彫刻刀」の名称を採用しているが、ここでは技術形態学的特徴から、少々まわりくどいが「彫刻刀形石器」の名称を用いる。
- (2) 芹沢による1974年の一般書には「剥片を素材とし、まず全周に裏面からの打撃を加え、さらに基部だけには表面からも打撃を加えて両面加工し、最後に右肩から左肩にかけて彫刻刀面をつくりだしたもの」（芹沢1974）という解説が記されている。この特徴は1959年の分類の中で第二分類とされる石器にのみ当てはまる特徴であり、少なくともこの時点で芹沢は荒屋遺跡出土の彫刻刀形石器を幾分限定的に捉えていたことがうかがえる。もっとも、一般書であるため記述が簡素化されたという可能性もある。

【引用文献】

- 加藤 学 2003 「いわゆる荒屋型彫器の形態的検討一範疇の検討と地域性の比較ー」『シンポジウム日本の細石刃文化』Ⅱ pp.25-52 ハケ岳旧石器研究グループ
 鹿又喜隆 2003 「荒屋型彫刻刀の機能—荒屋遺跡第2・3次発掘調査出土資料の分析を通してー」『シンポジウム日本の細石刃文化』Ⅱ pp.11-24 ハケ岳旧石器研究グループ
 芹沢長介 1959 「新潟県荒屋遺跡における細石刃文化と荒屋形彫刻刀について(予報)」『第四紀研究』1-5 pp.174-181
 芹沢長介 1974 「古代史発掘Ⅰ 最古の狩人たち」164p. 講談社
 堤 隆 1997 「荒屋型彫刻刀形石器の機能推定—埼玉県白草遺跡の石器使用痕分析からー」『旧石器考古学』54 pp.17-36
 東北大学考古学研究室編 2003 「荒屋遺跡: 第2・3次発掘調査報告書」267p
 水村孝行 1977 「荒屋型彫刻器について」『埼玉考古』16 pp.15-32
 山科 哲 2002 「荒屋型彫器の刃部再生」『駿台史学』115 pp.27-56
 山中一郎 1982 「荒屋遺跡出土の彫器—型式学的彫器研究の試みー」『考古学論考』pp.5-40
 綿貫俊一・堤 隆 1987 「荒屋遺跡の細石刃文化資料」『長野県考古学会誌』54pp.1-20



明治大学黒曜石研究センター

堤 隆

Takashi Tsutsumi

The arguments of the Mikoshiba Industries

Review article

真理を帯びて始まるものは、所詮は不可解なものとして終わらなくてはならないのだ

フランツ・カフカ

神子柴論争

天童川が貴く信州伊那谷、その河岸段丘へと連なる丘陵の突端に残された遺跡から、1958年、重厚な石斧と優美な尖頭器などが発見された。それは神子柴論争と呼ばれる困難な問題の舞台が幕を開けた瞬間でもあった。

1 はじめに

誰にでもすぐに思い浮かぶ日本考古学上の論争ははどうか。やはり「邪馬台国論争」ということになるのだろうか。石器研究者からすれば、畿内でも北部九州でも勝手にしてくれ、という思いだが、素人目にはやはり纏向遺跡のある畿内説が有利であるように思える。

旧石器時代の論争は「前期旧石器論争」は続いている。肯定派、否定派ともに立場を譲らないが、私は後者である。アーティファクトの認定に関する問題、海洋に断絶された日本列島へのサピエンス以前の人類の渡航問題、こうした問題とともに、2000年に発見した「前期旧石器遺跡捏造事件」の反省に立って、肯定には慎重な態度を取りたいとも思っているからである。

さて、筆者は、1958年に発掘調査された長野県神子柴遺跡の整理と50年後の研究報告（林・上伊那考

古学会編 2008）にかかわり、神子柴が提起する大きな研究上の問題について考えることを余儀なくされた。また、現在は「神子柴系石器群の生成とその性格をめぐる研究」（課題番号17K03216）として科研費を取得中である。したがってここでは、先史時代の大きな論争のひとつである「神子柴論争」を概観し、その争点についてふれてみたい。

2 発見と調査

2-1 「発見の10年」

神子柴遺跡の発見は1958年、日本の旧石器研究における「発見の10年」の終盤をかざる華やかな彩りがあった。

「発見の10年」とは何か。それは、戦後復興期の学問的希求と重なった「岩宿の発見」（発掘）の1949年



図1 神子柴遺跡の石器分布とその写真撮影

神子柴の理解に大きく役立っているが精緻な記録類である。石器出土状態の図面類、そしてカメラが普及しているとは言がたい状況下での数多くの写真類の存在である。撮影者は芹沢長介、土門拳の助手を務めた芹沢は、見事な写真の腕をみせた。1958年。

に始まるもので、それまで日本においてその存在が疑われていた旧石器時代の存在が明確になってから堰を切ったように続く発見の時代をさす。(堤 2011)。

岩宿の2年後、1951年には、東京都の茂呂遺跡で、ナイフ形石器が発掘される。ナイフ形石器なる用語法に今日疑義が、以後ナイフ形石器は、尖頭器、細石刃(細石器)とともに、石器文化階梯論における「三種の神器」をなすことになる。

1952年には諏訪市茶臼山遺跡で、局部磨製石斧を伴う石器群が発見された。磨製石斧は、旧石器時代の一般的な定義からはまったく外れる存在であったが、今日では日本列島の旧石器時代を特徴付ける個性的な要素となっていることはいうまでもないだろう。茶臼山での調査が先駆けをなしたわけである。

尖頭器の発見は、1953年長野県諏訪市の上ノ平遺跡が嚆矢となり、同じ年の長野県馬場平遺跡の尖頭器発掘へと続く。さらには1956年に芹沢長介が(冬の陣)、1957年には山内清男が(夏の陣)、新潟県本ノ木遺跡を相次いで調査し、尖頭器と土器の共伴をめぐって、芹沢 VS 山内の「本ノ木論争」が勃発する。つまりところそれは、旧石器時代と縄文時代をめぐる時

代観の相克でもあった。この視座が翌1958年の神子柴調査とも大いに絡んでくるわけである。

話しが「発見の10年」に戻そう。馬場平遺跡の発掘のあった1953年、調査者であった芹沢長介の心を引いたある石器があった。その石器を手がかりに、間髪をいれず芹沢は厳冬の野辺山高原から細石刃を探し当てるのである。この物語は「雪の中の針」といった感動的な文章にもなっている(藤森 1965)。さらにはその5年後の1958年には、荒屋型彫刻刀形石器と楔形細石刃石核をもつ新潟県荒屋遺跡の調査がなされ、矢出川とはまったく異なる北の細石刃石器群の存在が明らかにされることになった。

今日の旧石器時代研究のひとつのトレンドは石材研究であり、わけても黒曜石原産地分析などに焦点があてられているが、1955年には黒曜石原産地が注目を浴び、長野の男女倉遺跡群、北海道の白滝遺跡群という日本列島の二大黒曜石原産地の発掘調査が行われた。

神子柴の第一次調査の翌1959年には、長野県柳又遺跡が発掘され、茎(なかご)を持つ特徴的な有茎(舌)尖頭器が発見、神子柴に続く石器群の存在が姿を現すのである(小林 1967)。



No.18 石器
石核



No.15 石器
玉柄



No.22 石器
黒曜石



No.6 局部磨製石斧
黒雲母粘板岩



No.38 石器
碧玉



No.57 石核
黒曜石

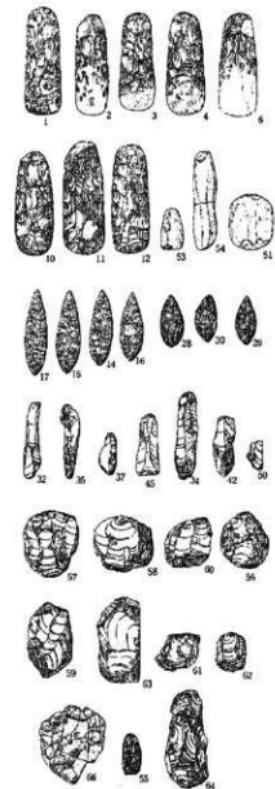


No.8 局部磨製石斧
凝灰岩

0 5cm

図2 神子柴遺跡の石器 国重要文化財 摄影：小川忠博

北群の石器



スポットC

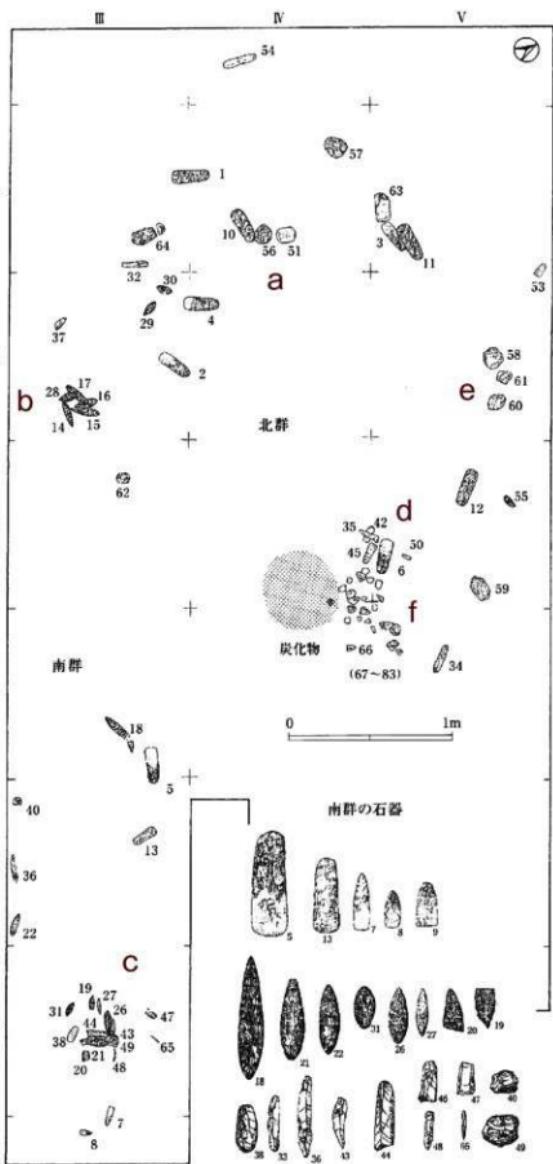


図3 神子柴遺跡の石器分布

A～Dグリッドにあたる北群、D～Fグリッドにあたる南群があり、さらに個別集中であるスポットa～fが認識できる。

2-2 神子柴遺跡の調査と検出された石器群

発見 学史的には埋もれているが、1956年には諫訪市手長丘遺跡においてナイフ形石器が発掘されていた。上諫訪中学校の校庭にあるこの遺跡の発掘にたずさわったのが、同校の教諭であった林茂樹である。その2年後、郷里にある伊那中学校に赴任した林は、上伊那郡史編纂委員会に所属し、伊那谷での旧石器探索に奔走する（林 1995）。

1958年8月、林は、南箕輪村の小学校にポイント状の石器が収蔵されているのを知り、ようやく出土地点を突き止め、その場所は同村の神子柴区であることを確認した。神子柴と名付けられたその遺跡の第一次調査は11月になされ、尖頭器や局部磨製石斧からなる石器群が姿を現したのである。発掘現場には芹沢長介が応援にかけつけた。翌1959年には第二次調査がなされ、第一次調査の際の取りこぼしとなるキュウリ形の砥石など石器数点が発見された。

石器 神子柴から出土した石器の内訳は、局部磨製石斧9点・打製石斧4点・尖頭器18点・撃器11点・削器8点・敲石2点・砥石2点・石核10点・石刃1点・削片1点・剥片21点の計87点である（図2）。

ため息の出るよう優美な神子柴の石器群は、藤森栄一をして「日本旧石器発掘史上最高の豪華版」と称さ

れるのだが（藤森 1965）、今日においてもこの表現は誇大とはいえない。発掘から30年後の1988年、これらのうち所在不明な石刃1点と剥片4点を除く全石器が、この時期を代表する重要な精巧な作りの石器群として、国の重要文化財に指定された。

石器分布 神子柴遺跡の石器分布は、7m×3mの範囲に広がり、径3mの環状を呈する北群とそれに隣接する南群とに分かれる（図3）。その特色は、剥片など一部の石器を除き、完成された石器ばかりが主体的に出土した点にある。また、それらの石器の状態は明らかに配置されたと思えるもののが多数あった。尖頭器数点が並べて置かれた場所、石核がまとめて置かれた場所、撃器・削器・尖頭器などがまとめられた場所など、石器を配置したスポットがいくつか残されていた。また、北群では炭化物らしき集中個所もみられた。

石材 その後の研究報告作成の際、神子柴遺跡の石器に用いられていた石材は、中村由克によって、黒曜石、下呂石、珪質頁岩、凝灰質頁岩、凝灰岩、「玉鶴」、碧玉（鉄石英）、黒雲母粘板岩、砂岩、緑色岩、安山岩の12種類であると同定された（中村 2008）。また、黒曜石全点は、望月明彦の蛍光X線分析による原産地同定で、遺跡から50kmほど離れた和田峠黒曜石原産地群を構成するいくつかの産地から運ばれたものであることが明らかになった（望月 2008）。下呂石は蛍光X線分析

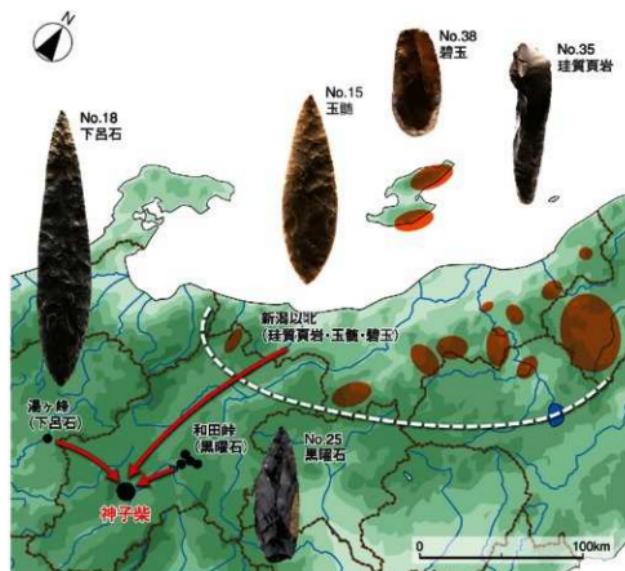


図4 神子柴遺跡に運ばれた石材

神子柴遺跡の石器石材は、黒曜石、下呂石、珪質頁岩、凝灰質頁岩、凝灰岩、「玉鶴」、碧玉（鉄石英）、黒雲母粘板岩、砂岩、緑色岩、安山岩の12種類である（中村 2008）。黒曜石全点は遺跡から50kmほど離れた和田峠黒曜石原産地群を構成するいくつかの産地から運ばれている（望月 2008）。

尖頭器や撃器に使用されている「玉鶴」は、新潟県中・北部で確認されており、日本海側に産地が推定される。珪質頁岩も新潟以北のものであろう。

石斧石材の黒雲母粘板岩、砂岩、緑色岩は、地元の領家帯に由来するもので、おそらく採集地は天竜川右岸で、遺跡近傍の大きな河川だったと推定される。

神子柴遺跡の石斧石材は遺跡近隣（10km圏内）から、黒曜石類は和田峠（約50km）から、下呂石は岐阜県湯ヶ峰（約60km）から、「玉鶴」や珪質頁岩などは新潟以北（約150km以上）の遠隔地から運ばれたということが見てきていく。

によっても、遺跡より約60km西方の岐阜県下呂市湯ヶ峰産であることが裏付けられた。尖頭器や搔器に使用されている「玉鶴」は、新潟県中・北部で確認されており、日本海側に産地が推定される。珪質頁岩も新潟以北のものであろう。

一方、石斧石材の黒雲母粘板岩、砂岩、緑色岩は、地元の領家帯に由来するもので、天竜川上流の西側の木曾山脈に分布する。おそらく採集地は天竜川右岸で、遺跡近傍の大きな河川だったと推定され、神子柴遺跡は石斧の石材獲得に優位な場所であったと中村は指摘する。

以上、石斧の石材は遺跡近隣（10km圏内）から、黒曜石類は和田岬（約50km）から、下呂石は岐阜県湯ヶ峰（約60km）から、「玉鶴」や珪質頁岩などは新潟以北（約150km以上）の遠隔地から神子柴遺跡に運ばれたということが見てきている（図4）。

3 神子柴系石器群をめぐる4つの議論

3-1 「神子柴論争」

神子柴遺跡をはじめとした神子柴系石器群をめぐっては、主に4つの議論が今までなされている。すなわち「性格論」・「機能論」・「出自論」・「時代論」である。この4つの議論は、他の石器群（あるいは時代）にも通底する根源的な問題であり、筆者は「神子柴論争」と総称している（堤2013）。

これらの問題に関しては様々な見解が示されており、そのすべてをすくい上げるのは紙数の関係上とうてい困難があるので、いくつかの代表的な認識について触れておくこととした。

3-2 性格論

「この出土状態の示す意味は何であろうか。墓地としての副葬の形、住居における用具の配置、経済行為としての貯蔵、祭祀儀礼の中の献納等、石器時代人の社会や生活の情報として重要である」（林1959）。

神子柴遺跡第一次調査の翌年、林茂樹はその性格についての多様な解釈の可能性に早くもそう言及している。今日でも性格論は、それぞれの主張が起立し、一歩も譲らない状況下にある。

縄文文化研究の泰斗山内清男らは、完成品や準完成品が固まって出土するデボ（収蔵遺跡）や製作遺跡は、製作地から消費地に介在する交易関係のもので、こうした現象は新石器に至って生じたものであるとす

る（山内1969）。岡本東三もその眼差しを受け取って神子柴を「社会的余剰」のなかでのデボと考え（岡本1979）、田中英司も神子柴をもっぱら小規模な「器財庫」的なデボ遺跡と考える（田中2001）。また、栗島義明は「デボの意義」を問うなかで、神子柴が交換の場として機能していたという解釈を提示し（栗島1990）、今日も先史社会における交換の意義を考え続ける（栗島2020）。

神子柴系文化の一貫して追い求めてきた森嶋稔は、1968年の唐沢B調査において神子柴ときわめて類似する石器群とともに炉址や土坑を検出したことから、「積極的に生活址的である」とする（森嶋1970）。稻田孝司もその性格は石器をまとめて置いたテント状の住居空間に他ならないと住居説を唱える（稻田2001）。そして神子柴遺跡は「遊動課程にある集団が遺跡地にたどり着いて間もない居住地の姿を濃厚にとどめている」のだという（稻田2008）。

神子柴遺跡が、伊那谷にあって南アルプスを見渡せる広いランズケープ性を有し、祭祀に関する非日常的・象徴的空間であるというのは、安斎正人である（安斎2001）。

当初の林の発言にもある神子柴遺跡の墳墓説はいたん立ち消えしたが、近年佐藤宏之は、副葬品を埋納した廐屋墓として新たな問題提起を行った（佐藤2018）。

デボか、交換の場か、住居か、祭祀か、墓か、また神子柴遺跡例のみが特殊なのか、他はどうなのか、性格論は神子柴論争のハイライトともいえる。

3-3 機能論

大形で完形品ばかりが目立つ神子柴系石器群の石器をめぐっては、未使用ではないかという疑惑は当然湧いてくる。また、実用か非実用かという議論もある。

神子柴型石斧の具体的機能（用途）に踏み込んだ安斎正人は、当初、神子柴型石斧は生活において機能した生活財というより威儀財・交換財であり、転換期の動揺する社会にあっての統合シンボルとしての儀器・祭器であったとする（安斎1987）。また、谷口康浩は、パプアニューギニアの民族誌などもふまえつつ、大形の神子柴型石斧に婚資（花嫁代價）としての性格を垣間み、それが集団間の社会的関係を形成・維持するシステムとして働いていたのではないかと論じる（谷口2006）。

一方、神子柴型石斧の使用実験を通して山田昌久は、

神子柴型石斧が横斧として十分に利用可能であることを論証し、人の足のように甲高なその断面は、伐採の際の横刃にかかる「アオリ圧」に耐えうる設計のためであるとしている（山田 2018）。

石斧のみならず尖頭器・搔器・削器などさまざまな石器も含め、神子柴の石器機能論については大きな問題が横たわっている。

3-4 出自論

考古学の伝統的なパラダイムのひとつに「伝播系統論」がある。当初から繰り返し述べられてきたシベリアなど大陸起源とされる「渡来石器」という概念は（た

とえば山内 1969）、「伝播系統論」の最たるものひとつといえよう。これは、石器あるいは土器の渡来が縄文文化の形成の源流となったという「縄文文化起源論」の一翼をなしている。

旧石器時代終末期から草創期の大陸文化の流入経路として岡本東三は、1：シベリア→カラフト→北海道ルート、2：沿海州→（日本海）→裏日本ルート、3：中国→朝鮮→九州ルートをあげ、「神子柴・長者久保文化は1、2の経路によってもたらされたもの」であろうとかつて指摘した（岡本 1979）。

「渡来石器」の考え方は栗島義明によても再三扱われ「縄文草創期には少なくとも3度にわたっての石

神子柴型石斧が出土した遺跡数（都道府県別）

北海道	14	埼玉	6	滋賀	0	徳島	0
青森	8	山梨	0	奈良	4	愛媛	10
岩手	8	千葉	6	和歌山	0	高知	1
秋田	0	東京	10	京都	1	福岡	9
宮城	1	神奈川	3	大阪	0	佐賀	1
山形	4	静岡	0	兵庫	3	長崎	5
福島	7	富山	3	岡山	3	熊本	1
新潟	25	石川	1	広島	2	大分	6
長野	17	福井	3	鳥取	0	宮崎	6
茨城	8	岐阜	4	島根	0	鹿児島	2
栃木	10	愛知	2	山口	2	沖縄	0
群馬	12	三重	16	香川	1	計	225

神子柴型石斧は東日本、ことに中部関東地方に濃密に分布する。北海道にも点が落ちるが、真正な神子柴型石斧と呼べる石器を出した遺跡はあまりない。



図 5 神子柴型石斧をもつ石器群の分布

神子柴系石器群の指標である神子柴型石斧をもつ石器群を、岡本東三による分布図（岡本 1979）、および「日本列島の旧石器時代遺跡データベース」（日本旧石器学会 2010）をもとにプロットした。

器渡来が存在し」「その最初は石斧・石槍そして土器の渡来であり、次に有茎尖頭器、そして半月形石器、石鏃、断面三角形錐、矢柄研磨器の渡来である」と述べ、さらにはこれらを沿海州のオシポフカ文化と関連付け「古段階の遺跡がより北海道を中心とした東北日本に偏在することが理解され」「こうした列島内様相も同文化の北方ルートからの伝播を物語っている」と評価している（栗島 1991）。

一方、安斎正人は、「神子柴・長者久保文化」の大陸渡來說批判を行うなかで、従来の「伝播系統論」から「形成過程論」へとパラダイムチェンジを試みる（安斎 2002）。そして「東北日本、特に中部地方の槍先形尖頭器石器群を有する在地集団が、北海道から南下してきた細石刃石器群を有する異集団と遭遇し、その社会的緊張下で自意識（アイデンティティ）を高めていった。そして生み出されたのが、神子柴石器群なのである」との認識に至るのである（安斎 2010）。

いずれにしても、その出自をめぐっては、神子柴系石器群の分布の濃淡（図 5）やその年代をもとに、今一度検討してみる必要がある。

3-5 時代論

神子柴遺跡の発掘の前々年（1956）の「冬の陣」、そして前年（1957）の「夏の陣」で、尖頭器と土器の共伴関係をめぐって、芹沢と山内が激しく対立した「本ノ木論争」は、旧石器時代そして縄文時代にかかる時代観の異なりに根ざした相克であった。その後に調査された神子柴も、土器の有無の問題視から、きわめて注意深い発掘がなされたが、つまるところ土器は検出されなかった。

時代をわける要素とは何か。石刃技法の存在、土器の共伴の有無、あるいはモノをめぐる交換体系など社会システムのあり方、などがあげられようか。岡本東三は弓矢の出現をもって縄文文化の成立とし、旧石器的な石刃技法を持つ「神子柴・長者久保文化」を「先土器時代の最終末期」にあてるが（岡本 1979）、「先土器時代とみるか、縄文時代とみるかといった二者択一的な問題ではない」とも指摘している（岡本 1999）。

「縄文文化起源論の再構築」を試みる谷口康浩は、神子柴がしばしば置かれる「草創期」という認識に疑問を呈し、あえて両時代の「移行期」の中でこの問題をとらえようとするのである（谷口 2011）。しかし「移行期」という主体性のなさにも少々違和感が残る。

4 検証：機能論へのアプローチ

性格・機能・出自・時代、これら4つの議論に関しては、いわば解釈論や認識論の範疇にあって、解決しようがない部分が含まれている。私はこう思う、的な世界である。とはいえるここでは、筆者がこれまで主に行ってきた「機能論」に関してのアプローチについて述べ、展望のひとつを提示しておきたい。

さきに述べたように、大形で優美な完形品が含まれる神子柴系石器群の石器に関しては、未使用ではないかという疑惑は当然湧いてくる。加えて、実用か非実用かという議論もある。この問題に関して筆者は、顕微鏡観察等に基づいた痕跡研究の視座から唐沢 B・大平山元 I・神子柴・小鍛冶原遺跡の分析を行い、一定の見通しを得ることができた。この点についてふれ収束としたい。

筆者が神子柴系石器群の顕微鏡観察の機会を得たのは、唐沢 B 遺跡の報告にたずさわった際が最初である（堤 1998）。石斧を特徴的に含む唐沢 B 遺跡の石器全 36 点のうちそのほとんどに使用痕が観察されなかつたが、ただ 1 点のみ使用痕をもつものがあった。小形の局部磨製石斧に激しいエッジダメージが見られたのである。これに対し、唐沢 B の代名詞ともいえる大形の局部磨製石斧にはまったく使用痕がみられなかった。このことは神子柴遺跡も同様で、大形の局部磨製石斧にはまったく使用痕が見られないに対し、凝灰岩製の小形の局部磨製石斧には 1 点のみであるがおそらく使用による折れの後、再加工した痕跡が確認された（図 6）（堤 2008）。

使用痕未検出=未使用という図式は成り立たないの



図 6 折れた神子柴型石斧

刃部が直線的に折れ、その後再加工がなされたとみられる神子柴型石斧。片面は、折れに先行する研磨面である。凝灰岩製で、8.7 (長) × 4.3 (幅) × 1.55 (厚) cm の小形品。神子柴遺跡 No.9。

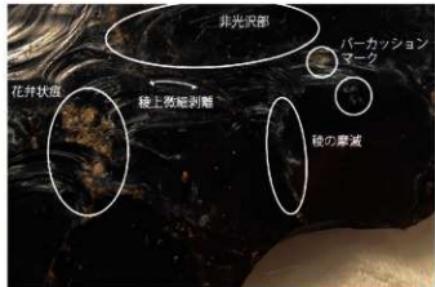


写真1 No.20の半分に折れた尖頭器に残る使用痕で、側縁に直交する無数の線状痕（50倍）。また、稜の摩滅も激しい。尖頭器の側縁を用い、直交方向にカットの作業を行ったものとみられる。被加工物を特定する光沢は判別できなかった。

写真2 No.19の尖頭器に残る運搬痕。持ち運びの際に他の石器との摩擦やぶつかりにより生じたスリガラス状の非光沢部、稜の摩滅や稜上微細剝離、バーカッショングマーク、花井状痕。これらはかなり激しいキズで、実験によると 200 ~ 300km の距離を運ばないと生じなかつた。

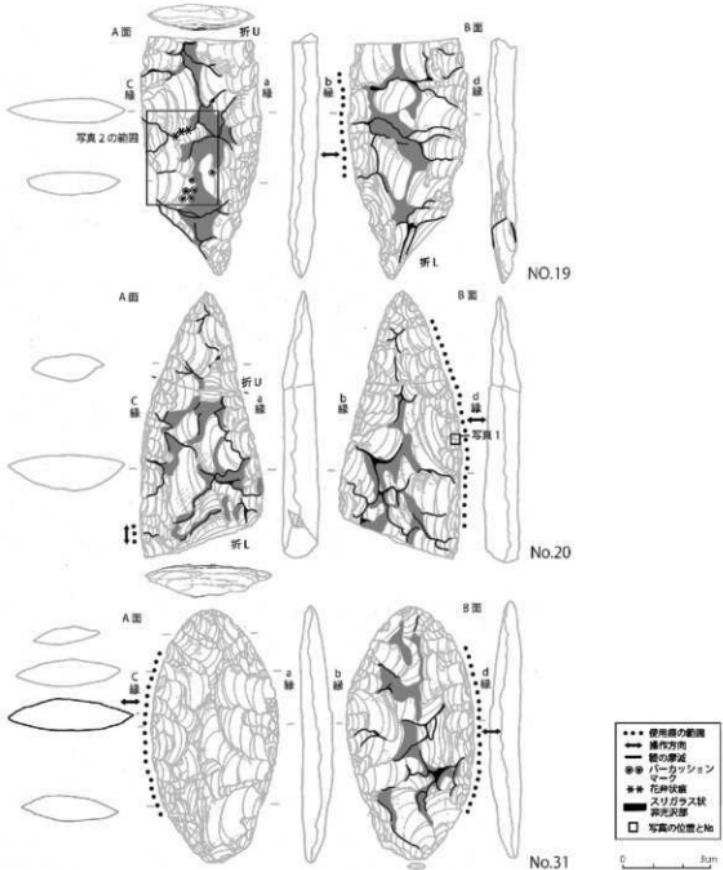


図7 黒曜石の尖頭器に残る使用痕と運搬痕

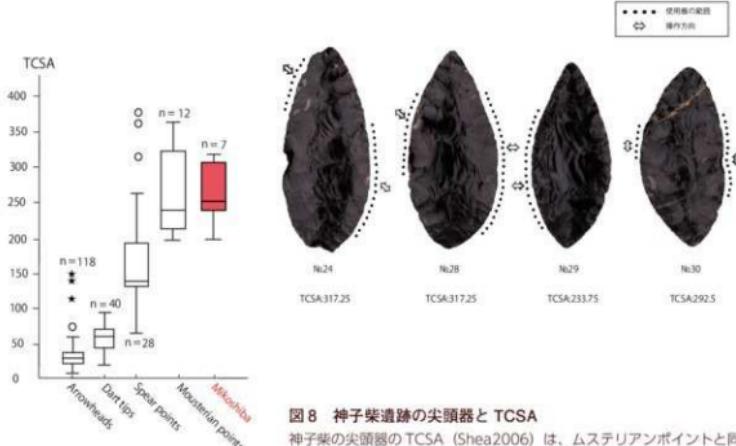


図8 神子柴遺跡の尖頭器とTCSA

神子柴の尖頭器のTCSA (Shea 2006) は、ムステリアンポイントと同じ領域になる。

は自明であるのだが、こと神子柴遺跡や唐沢B遺跡の大型石斧に関しては未使用の可能性が高いものと思われる。こうしたことから、パプアニューギニアの民族例にもみるように大形の斧=儀礼用、小形の斧=実用という棲み分けが生じているのではないかとも考えてみた(堤2013)。大型品に関しては、谷口の指摘のように「婚資」とまでいえるかはわからないが(谷口前掲)、「財」である可能性を考えている。

一方、神子柴遺跡の尖頭器類を顕微鏡観察した時は、衝撃的だった。おそらく使用痕などないだろと思っていたのだが、黒曜石の尖頭器7点に激しい使用痕がみられたのである。しかも使用痕は側縁に残されており(図7写真1)、いずれもナイフのように切ったり削ったりする機能が想定され、乾燥した皮によって生じる使用光沢も一部に認められた。尖頭器は、通常その形から狩猟具の“槍先”として使用されたとみられがちであるが、この使用痕分析の結果は從来の想定の再考をうながす結果となった(堤2008)。

その後ふたたび神子柴の尖頭器を観察した際、3つの尖頭器の表面に激しい擦れキズがついていることがわかった(図7写真2)。運搬痕とみられるものである。これらの石器は、運搬実験の結果などをふまえ、かなりの長距離(200km以上)をへて神子柴に運ばれたものと考えられた(堤2018)。神子柴から和田岬までの直線距離は80kmほどであるので、おそらくいくつかの場所を経由しながら神子柴にたどりついたと見るべきだろう。さらにその尖頭器には両端を古く欠損するものがあり、神子柴を構成する石器が必ずしも未使用

の完成品のみでなく、使用され欠損した廃棄品(遺棄品)であることが再認識される。クールな大型の局部磨製石斧に対し、日常というべきか、生活臭が感じられる道具である。

例えば、神子柴遺跡に限っていえば、打製石斧(未製品)、局部磨製石斧(完成品)、破壊石斧、破損尖頭器(使用後・廃棄品)など、いくつかのライフステージが混在していることに目を向けるべきである。かつそれらが、もたらされた産地も個々に大きく異なっていることに注意したい。

5. おわりに

1958年に最初に発掘された神子柴遺跡、10年後の1968年に発掘された唐沢B遺跡、このふたつの巨頭がある意味をわめて個性的で強烈な存在であったがために、それ以外の遺跡との相違を見失ってしまった感がある。確かに完品の石器が集積されるという広い共通項はあるのだが、個々の遺跡の相違を丹念に見極める作業が、「神子柴論争」の解明にとって今一度必要であることを痛感する。

本稿にあっては、紙数の制約などにもより、主要な認識のみの抽出にとどまり、網羅的に意見を拾い上げることができなかった。より細かな議論については、別の機会を設けて検討することにしたい。

本研究は、堤隆に交付されたJSPS科研費基盤研究(C)「神子柴系石器群の生成とその性格をめぐる研究」(課題番号17K03216)の成果の一部である。

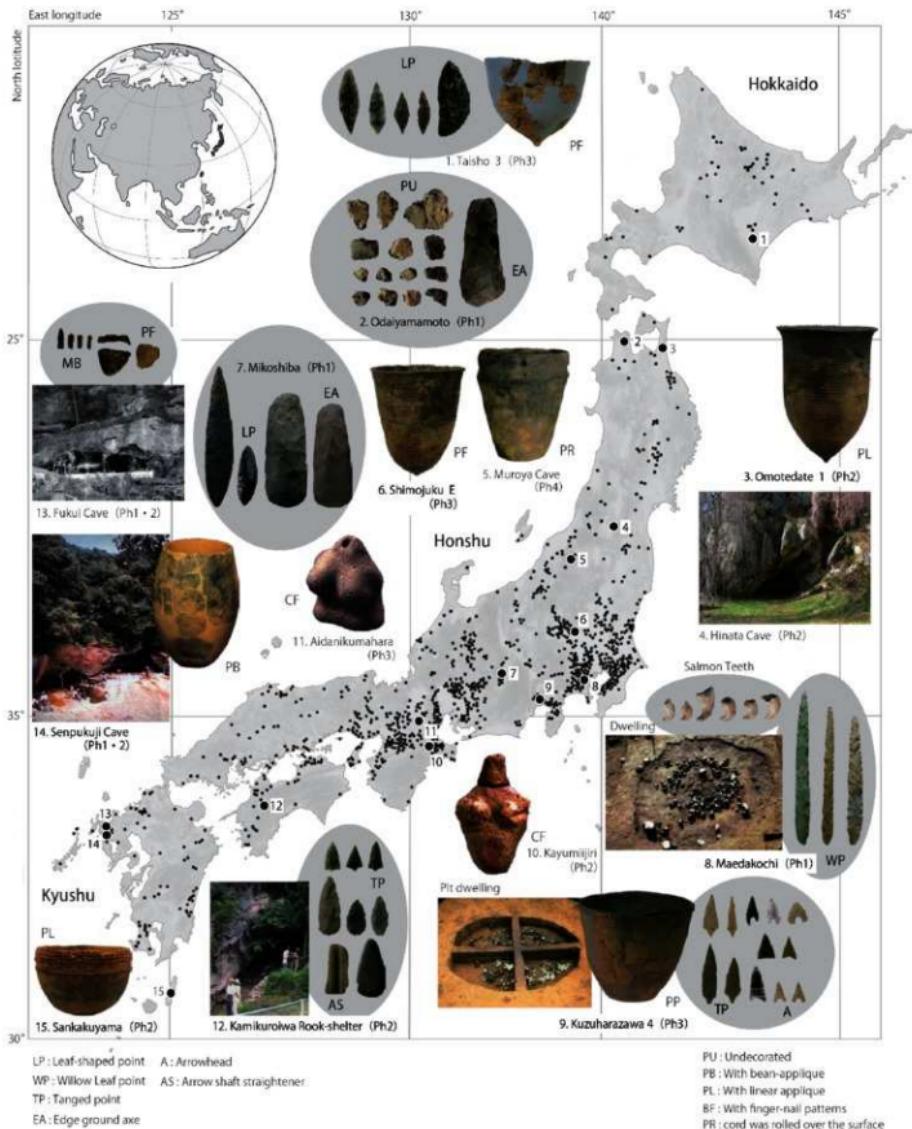


Fig.9 Incipient Jomon Sites in the Japanese Archipelago

引用文献

- 安斎正人 1987 「先史学の方法と理論—渡辺仁著「ヒトはなぜたちあがったか」を読む(4)ー」『旧石器考古学』35 pp.1-16
- 安斎正人 2001 「長野県神子柴遺跡の象徴性：方法としての景観考古学と象徴考古学」『先史考古学論集』10 pp.51-72 先史考古学研究会
- 安斎正人 2002 「『神子柴・長者久保文化』の大陸渡來說 批判—伝播系統論から形成過程論へー」『物質文化』72 pp.1-20 物質文化研究会
- 安斎正人 2010 「日本人とは何か—考古学が今語れることー」334 p. 柏書房
- 稻田季司 2001 「遊動する旧石器人」170p. 岩波書店
- 稻田季司 2008 「神子柴遺跡の生活と集団」「神子柴」pp.310-322 信毎書籍出版センター
- 岡本東三 1979 「長者久保・神子柴文化について」「研究論集」V pp.1-57 奈良国立文化財研究所
- 岡本東三 1999 「神子柴文化をめぐる40年の軌跡—移行期をめぐるカオス・」『先史考古学論集』7 pp.1-22 先史考古学研究会
- 栗島義明 1990 「デボの意義—縄文時代草創期の石器交換をめぐる遺跡間連鎖ー」「埼玉県埋蔵文化財調査事業団研究紀要」7 pp.1-44
- 栗島義明 1991 「北からの新石器革命」「考古学ジャーナル」341 pp.8-13 ニューサイエンス社
- 栗島義明 2020 「『神子柴論争』の行方」「資源環境と人類」pp.1-23 明治大学黒耀石研究センター
- 小林達雄 1967 「長野県西筑摩郡開田村柳又遺跡の有舌尖頭器」「信濃」19-4 pp.25-32 信濃史学会
- 佐藤宏之 2018 「神子柴遺跡はなぜ残されたか」「シンポジウム神子柴系石器群：その存在と影響」pp.5-8 ハケ岳旧石器研究グループ
- 田中英司 2000 「斧のある場所」「日本考古学」9 pp.1-19 日本考古学協会
- 谷口康浩 2006 「財としての神子柴型石斧」「長野県考古学会誌」118 pp.13-40 長野県考古学会
- 谷口康浩 2011 「縄文文化起源論の再構築」293 p. 同成社
- 堤 隆 1998 「唐沢B遺跡の様相」「唐沢B遺跡—後期旧石器時代末から縄文時代草創期にかけての移行期の石器群ー」pp.57-72 千曲川水系古代文化研究所
- 堤 隆 2008 「神子柴遺跡における石器の機能推定」「神子柴」pp.268-289 信毎書籍出版センター
- 堤 隆 2011 「列島の考古学：旧石器時代」128p. 河出書房新社
- 堤 隆 2013 「狩猟採集民のコスモロジー：神子柴遺跡」P94 新泉社
- 堤 隆 2018 「バイフェイスを携えて：神子柴遺跡に残されたモバイル・ツール」「シンポジウム神子柴系石器群とは何か」pp.31-34 ハケ岳旧石器研究グループ
- 中村由克 2008 「神子柴遺跡出土石器の石材とその原産地の推定」「神子柴」pp.220-241 信毎書籍出版センター
- 日本旧石器学会編 2010 「日本列島の旧石器時代遺跡—日本旧石器（先土器・岩宿）時代遺跡のデータベースー」377p.
- 林 茂樹 1995 「伊那の石槍：フィールドノートから」143 p. 伊那埋蔵文化財研究所
- 林茂樹・上伊那考古学会編 2008 「神子柴」407 p. 信毎書籍出版センター
- 藤森栄一 1965 「旧石器の狩人」244 p. 学生社
- 望月明彦 2008 「神子柴遺跡出土石器の産地推定」「神子柴」pp.211-219 信毎書籍出版センター
- 森鷗 稔 1970 「神子柴型石斧をめぐっての再論」「信濃」pp.156-172 信濃史学会
- 山田昌久 2018 「日本原始・古代の木工技術－伐採・製材技術と減少・増加加工技術ー」「モノと技術の古代史木器編」pp. 15-76 吉川弘文館
- 山内清男 1969 「縄紋草創期の諸問題」「ミュージアム」224 pp.4-22
- 山内清男・佐藤達夫 1962 「縄紋土器の古さ」「科学読売」12 (13) pp.18-26, pp.84-88 読売新聞社
- Shea, J. J. 2006 The Origins of Lithic Projectile Point Technology: Evidence from Africa, the Levant, and Europe, *Journal of Archaeological Science* 33: 823-846.

■ 神子柴の石器全点を展示 伊那市創造館

長野県伊那市伊那市駅前にある展示施設。1988年6月6日に国重要文化財指定となつた神子柴遺跡の石器全点は圧巻。また、神子柴の石器出土状態、石器分布の展示などもある。同じ神子柴系石器群の小笠原遺跡の石器も展示。
一般無料、休館日・入園日と祝日の翌日。車で15分の神子柴遺跡もあわせて訪ねたい。
場所は「伊那市創造館」「神子柴遺跡」でグーグルマップですぐヒットする。





旧石器遺跡への旅

ホーレ・フェルス洞窟 ドイツ

明治大学黒耀石研究センター 堤 隆一

1 最古のフルート

母の胸で聞く子守歌から、ポップス、ロック、クラシック、そして終のレクイエムまで、人間にとって音楽のない人生など考えがたいが、人間が音楽を愛するようになったのは、いったいいつからなのか?

そうした考古学的疑問に答える最古の証拠が、南ドイツのホーレ・フェルス洞窟から発見されている。

2009年5月14日付の「ネイチャー」を飾ったのは、この洞窟から発見された骨製のフルートであった。日本でも新聞の一面を飾ったニュースであったので、ご記憶の方もあるかと思う。

結局フルートは3点が発見され、保存状態のよい良好なシロエリハゲワシの骨製のものは、長さ21.8cm、直径8mmで、口を当てる部分にはV字形の深い切れ込みが2か所、5つの指穴を持ち、幅広い音階を持っていたと推定される。残る2点はマンモスの牙製であった。年代は35,000年前を超えるものとみられる。

ホーレ・フェルス洞窟は、現在もドイツ・チュービンゲン大学のニコラス・コナード教授らが率いる研究チームによって発掘調査が続けられている。

2012年8月、幸運にも筆者は、小野昭さんのお導きによって、チュービンゲン大学にコナード教授を訪ね、ホーレ・フェルス洞窟を訪れる事ができた。

2 チュービンゲンの街

中世都市チュービンゲン、街には石畳が続き、とても気品があって、家々のベランダは、ゼラニウムだろうか夏の美しい花で飾られていた。1078年創建の中世の城だというチュービンゲン大学のコナード教授の研究室を訪ね、大学の考古学博物館を見た。

漆黒の展示室の中には、ガラスケースが並び、スポットライトがマンモスの牙の影像を浮かび上がらせる。ウマ、ライオンなど、手のひらに収まるほどの小形さではあるが、見事な人類最古のアートである。発掘にあたったコナード教授はいう。

「芸術は最初から完成されたものとしてあった」

晚餐は、教授にご招待いただき、市庁舎の近くの「フォッレレ」=鯨という名の有名なシュヴァーベンの郷土料理店で堪能した。シーベルトのドイツ歌曲「鯨」を彷彿させる。ほろ酔いで夜の街を散歩したあと教授



図1 チュービンゲン大学コナード教授の研究室で



図2 ホーレ・フェルス洞窟とブルーメントリット氏（左端）



図3 洞窟内のフルート発見地点（土壘下の地層）

のご自宅にまでうかがって、たくさんの蔵書に囲まれながらコニャックをご馳走になった。帰り際にコナード教授が黒い小箱をプレゼントしてくれた。中には精緻にできたビーナスのレプリカが収められていた。

3 顔のないビーナス像

そのビーナス像は、マンモスの牙の彫像で、高さ6cm、幅が3cm、重さが33g程である。弾丸のように突き出した巨大な乳房、それを抱え込むような腕、その先の指、女性器の印刻、どっしりとした腰と尻、しかし何故か顔がなく、顔の部分には環状の突起がついてヒモが掛けられるようになっている。つまりはペンダントヘッドとみられる。時期はオーリナシアン文化期で、周囲の放射性炭素年代からは35,000年を遡る較正年代が得られるという。文句なしに世界最古のビーナス像だ。

これは、もっともよく知られたビーナス像であるオーストリアのヴィレンドルフのビーナス像とも共通するフォルムである。顔のないことと、その年代の古さを除けばだが。(ヴィレンドルフのほうが1万年は新しいクラベット文化期)

4 ホーレ・フェルスと旧石器洞窟群

ホーレ・フェルスに到着すると、洞窟の入り口は頑丈な鉄扉で閉ざされていた。その施錠を開けて下さったのが、この洞窟を1957年に最初に調査したブルーメン

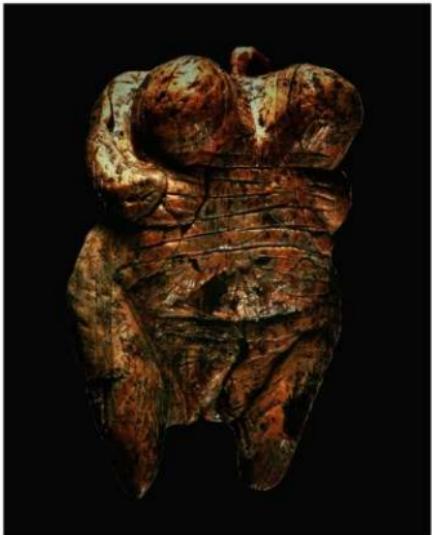


図4 世界最古のビーナス像（マンモスの牙製・実物は6cm）

トリットさんであった。氏の案内で、奥深い洞窟の内部へと進む。夏ではありながらも洞窟の内部はひんやりと気持ちいい。発見は洞窟の入り口より30メートルほど進んだ深い地層堆積中からなされた。2008年、5月まずはビーナス像が発見され、その後70cm横からフルートが発見されたのだという。洞窟内に渡された鉄の足場を進むと現在も調査中のこの地点は土壘が山積みで保護されていた。

見つかった最古のフルートから、どんな音色が流れたのか、旧石器人の五線譜を洞窟の闇の中にたどってみたい、そんな思いが募った。

出土したフルートは、それと言わなければわからないくらいにひっそりと、洞窟のあるブラウボイレンの街の博物館に展示されていた。

2017年、ユネスコの世界遺産リストに、ホーレ・フェルスを含む6つの旧石器時代洞窟が「シュヴァーベン・ジュラにある洞窟群と氷河期の芸術」として登録された。シュヴァーベン・ジュラ山脈地域のアッハ渓谷にあるホーレ・フェルス、ガイセンクレスト、ジルゲンシュタイン洞窟と、ローネ渓谷にあるボックシュタイン、ホーレンシュタイン・シュターデル、フオーゲルヘルト洞窟である。

旧石器時代のアーティストたちに会いたくなったら、南ドイツへの旅をお進めしたい。遙か氷河期からの彫像を、冷えたビールとともに堪能できるに違いない。

旧石器基礎研究・次世代育成研究グループ 2019 年度活動概要

研究グループ代表者 堤 隆

諸科学においては基礎研究の重要性は認識されながらも、どうしても新奇な研究に目を奪われがちである。

本グループ通称“パレオ・ラブ”では、旧石器時代における基礎研究について重要性と方向性を再確認するとともに、若手研究者（主に考古学専攻生）の次世代育成を主たる目標として掲げた。

2019 年度は 4 回の研究会を持った。

第1回 2019 年 6 月 15 日、相模原市博物館と共に田名向原遺跡のある旧石器ハテナ館において、相模野台地の旧石器の基礎観察会を行い、相模野の旧石器に関するシンポジウムを行った。

第2回 2019 年 8 月 24 日・25 日、長野県の八風山ガラス質黒色安山岩原産地および和田岬 黒曜石原産地において、原産地遺跡群とはどのような性格をもつものか、そして原石はどのような産状なのかの踏査を行った。また、浅間縄文ミュージアムにおいて、礫群による石蒸し料理の実験を行い、礫群の機能を考えた。

第3回 2019 年 9 月 22 日、東京都埋蔵文化財センターと共に、同センターを会場に、旧石器時代の石器製作とはどのようなテクニックによるのか、山形県埋蔵文化財センター大場正善氏を講師に、石器製作技術を観察する機会を設けた。

第4回 2020 年 2 月 16 日、群馬県岩宿博物館と共に、同館に会場提供をいただき、第3回に実施した「石器製作技術観察会」をより深めるために、観察だけでなく、石器製作を行う機会を設けた。講師は大場正善氏および小菅将夫氏（岩宿博物館館長）で、本誌でも執筆いただいている金彦中氏にお手伝いいただいた。敲石や鹿角ハンマーにより、10 名の学生が尖頭器の製作を行った。初めて石を割る学生も多かったが、ケガ人もせずよい経験になったと考える。

上記 4 回において、多くの日本旧石器学会員の参加や援助をうけ、旧石器に関心のある考古学専攻生が 1 学年から院生まで 30 名以上集まった。駒澤・静岡・首都・大正・中央・鶴見・東海・東北芸術工科・東京・名古屋・南山・日本・明治・早稲田の 14 の大学からの参加であった。当初は、数名程度の参加だろうと思っていたので、その関心の高さにいささか驚いた。

それにしても本 2020 年度は、コロナウィルスの影響で研究会を持てずにいる。困難だが在宅でも可能な活動を模索中である。



図 1 相模野台地の旧石器基礎観察会



図 2 長野県の和田岬黒曜石原産地の踏査



図 3 石器製作技術を観察会

旧石器基礎研究・次世代育成

研究グループの概要

【旧石器基礎研究機会の確保と展望、そして研究への情熱】

Palaeolithic Learning, Opportunity and View

【愛称：Palaeo love】

1 会の目的

多くの科学において基礎研究の残置が叫ばれて久しい。また、若手研究者の不在も大きな悩みである。

本グループでは、旧石器時代の基礎研究の再確認を行うとともにその方向性を見つめ、あわせて若手（次世代）研究者の育成を行う。

2 当面の会の活動方針

① フィールドワークの実践

石材原産地の踏査

あとがき

堀 隆

“Communications of the Palaeo Perspective：旧石器時代研究への視座”の第1号をお届けする。

ネット社会の強みを生かしダウンロードフリーの研究誌とした。多くの方にご覧いただくことを期待したい。

本誌中、金彦中さん、両角太一さん、小野寺優斗さんは、この研究会に参加いただいた学生のみなさんである。それぞれの指導教官、および第三者に何度も指導や査読をいただき掲載となった。加えて関連分野の先達に貴重なコメントをいただくことができた。

本会は、まったく活動費を持っていないため、現場で苦労（クロウ）を重ねている多くの社会人（玄人）から、将来の研究者のための貴重なご厚志を頂戴することができた。

いわく“（玄人）クロウト・ファンディング”と称している。

ダジャレだが、通常のクラウド・ファンディングのように率の高い手数料が必要ないため、有利に資金を活用できた。（もちろんリターンはある）また、日本旧石器学会からも活動費の援助をうけた。厚く御礼申し上げる次第である。

本会の愛称“パレオ・ラブ”から連想されるのは、最先

旧石器遺跡の踏査

- ② 石器観察・製作の実践
博物館・文化財施設での石器観察 基本石材同定 石器製作実験
- ③ 学会・研究会への参加
シンポジウム
研究発表の実践
- ④ 情報誌 Communications of the Palaeo Perspective
：旧石器時代研究への視座の刊行
学生自身の文章による論考執筆の実践
査読による客觀性の担保
ダウンロードフリーによる幅広い情報の共有
- ⑤ 参加対象
考古学・人類学・第四紀学等を専攻する学生、考古学研究者など。一般的の参加も妨げない。

3 事務局・代表者 堀 隆

端の自然科学分析を行う会社“パレオ・ラボ”に違いない。

お察しのとおりそのパロディが本会のニックネームである。通常なら名譽棄損にあたるかもしれないこのユーモアを理解してくれた同社の中村賢太郎社長の懐の深さに感謝したい。

■ 本誌の査読・原稿点検ほかをお願いした方 (50音順)

青野友哉、大沼克彦、小野昭、加藤学、渋谷孝雄、橋詰潤、御堂島正、森泉智哉、藤山龍造

■ パレオ・ラブ参加院生・学生 (50音順)

阿部桜果、石川匠、鶴飼芽衣、宇根宏紀、江草俊作、塩原健、小野寺優斗、金彦中、小林愛美、小林萌絵、齊藤麻耶、丁沼、舍川史矩、須賀永輝、高梨綾子、津滝勇馬、玉井夏子、立木薫、朽木広夢、戸塚瞬翼、難波江春凪、西村広経、両角太一、山地雄大

■ クロウト・ファンディングでご寄付を頂いた方 (50音順)

五十嵐彰、五十嵐ジャンヌ、井関文明、稻葉理恵、大場正善、小野草太郎、加藤学、龜田直美、川道寛、網川一徳、沢田敦、寒川朋枝、下岡順直、鈴木美保、課訪問順、高屋敷飛鳥、谷畠美帆、立木宏明、長崎潤一、中村由克、堀恭介、前原豊、西井幸雄、新田浩三、丹羽野裕、橋口豊、藤野次史、山本郁子、吉留頌平、脇幸生

Communications of the Palaeo Perspective

旧石器時代研究への視座 Vol.1

刊行日 2020年7月7日

編集者 堀 隆

編集機関 旧石器基礎研究・次世代育成研究グループ

刊行場所 長野県佐久市岩村田 堀 隆方

査読 有（エッセイ等は除く）

総頁数 32頁

Communications of the Palaeo Perspective



[Palaeo love]

Palaeolithic Learning, Opportunity and View

Contents

■ Preface	
Measurement of lithic tools: It's emotion and ruthlessness	Akira Ono 1
■ Article	
Did the Technique "Indirect Percussion" Exist in the Palaeolithic Period? : A Study Based on the Analyses of Four Groups of Blades Experimentally Manufactured and the Blades from the Iwaizawa Site, Yamagata Prefecture	Eonjung Kim 2
Comment on E. Kim's paper " Did the Technique "Indirect Percussion" Exist in the Palaeolithic Period?"	Katsuhiko Onuma 6
■ Palaeo Reference	
Recommended Books for Palaeolithic Studies	Asuka Takayashiki 7
■ Research Design	
Technological Organization, Traceology, and Area Studies	Atsushi Sawada 8
■ Report	
A lithic artifact of surface collection from the Miyadaira site	Taichi Morozumi 10
Comment on T. Morozumi's paper " Lithic artifact of surface collection from the Miyadaira site."	Jun Hashizume 15
■ Palaeo-paedua	
Araya-type Burin	Yuto Onodera 16
■ Review Article	
The arguments of the Mikoshiba Industries	Takashi Tsutsumi 18
■ A Trip to the Palaeolithic Site in the World "Hohle Fels Cave"	Takashi Tsutsumi 30
■ Annual report of research activities:Fiscal year 2019	32